

大賞

「好きじゃないひと」 高穂ひさ

優秀賞

「財布なんざ常に領収書でいっぱいだ」 南藻ナイ

「柿」 山田 龍太

「トモちゃんと猫」 苛屋

第11回熊本大学

東光原文学賞作品集



2019年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十一回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十一回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 高宮 正之 / 4

第十一回熊本大学東光原文学賞作品集の公刊にあたって

大賞

好きじゃないひと

高穂 ひさ / 7

(薬学部薬学科一年)

優秀賞

財布なんざ常に領収書でいっぱいだ

南藻 ナイ / 41

(理学部理学科一年)

優秀賞

柿

山田 龍太 / 65

(文学部総合人間学科三年)

優秀賞

トモちゃんと猫

苛屋 / 87

(文学部文学科四年)

選考を終えて

跡上 史郎 「東光原文学賞総評」 / 113

松岡 浩史 「講評」 / 117

岩瀬 茂美 「講評 すぐにはわからないもの」 / 120

第十一回熊本大学東光原文学賞作品集の

公刊にあたって

附属図書館長 高 宮 正 之

熊本大学附属図書館では、平成三十年度も本学学生（学部生、大学院生、留学生等）を対象とした「東光原文学賞」を設置し、作品を募集しました。本文学賞は、今年度で十一回目となりました。六月中旬から募集を始め、十一月六日を〆切とし、十二月十七日に三名の先生方による選考委員会が開かれて四名の受賞者を決定し、センター試験前日の一月十八日に図書館グループ学修室にての授賞式を終え、一連の事業が完了しました。授賞式では、大賞一名がその場で発表され、優秀賞三名と共に表彰状と副賞が手渡されました。受賞者は満面の笑みを浮かべながら、それぞれ喜びを語ってくれました。その後、各選考委員からの講評、記念撮影や新聞記者からのインタビューなどが有り、授賞式を終りました。入賞された皆様に改めてお祝い申し上げますと共に、惜しくも選に漏れた方や今年度応募されなかった方を含めて、来年度も多くの学生による更なる挑戦を歓迎します。選考委員会メンバーとして短期間内での作品選考をお引き受けくださった、跡上史郎委員長（本学大学院人文社会科学部文学系）、岩瀬茂美委員（熊本日日

新聞社編集委員兼論説委員）、松岡浩史委員（本学大学院人文社会科学研究所文学系）の三先生に厚くお礼申し上げます。また、通常の職責に加えて、募集案作りから、一次選考、授賞式まで、この事業のために多くの時間を割いて下さった附属図書館関係各位の労をねぎらいたいと思います。

本年度の応募作品数は、十五編と昨年の十三編から微増しました。内容は、文学・教育学・法学・理学・薬学の五学部学生からの作品十三編と、社会文化科学研究科の大学院生からの作品二編でした。昨年 of 学部生の応募は、文学部からのみでしたので、総合大学らしく、広い分野から応募いただいたことは、館として嬉しい限りです。結果は大賞が薬学部一年生、優秀賞が文学部三、四年生と理学部一年生でした。私は選考委員会メンバーではありませんが、昨年と同様、応募作品を読み、選考会議に同席させていただきました。作品の選考では、学生の所属・学年・性別等の背景はもちろん、ペンネームも一切伏せた上で審査を行い、選考結果が出たのちに学生の所属等が明かされます。選ばれた一年生お二人の作品は、私も一気に何十年も昔に引き戻され、高校生から大学生に変わった当時の不安定な感覚が思い出されました。文学部のお二人は、昨年も優秀賞の受賞者でしたが、作風やテーマが全く異なっていて、候補作として読んでいた時はお二人のことを想像できず、創作への挑戦意欲と技量の向上に驚かされました。選考委員の先生方の専門的な講評は、作品集巻末をご覧ください。

創設当初の本文学賞の狙いは、知・徳・情のバランスを備えた人材を育成し、大学生の読書離れ図書館離れの流れを押しとどめ、文章作成能力の涵養をはかることだったそうです。そのよう

なある意味のスキルアップだけではなく、文学作品の創作や読書が、学生の今後の人生への救いや心の豊かさへの導入に役立つと信じます。本文学賞のタイトルである「東光原文学賞」の名称は、現在の附属図書館（中央館）敷地一帯が、熊本大学前身の旧制第五高等学校時代に「東光原」と称する運動場であったことに由来します。当時の龍南健児（五高生）が自由に自主的に教養を深め、体育関係の訓練を積み、自己の意志に基づいて人間形成を行った場所である東光原の名を冠した文学賞なのです。多くの著名な作家を輩出した系譜が、現在の熊大生にも引き継がれ、来年度以降も多くの素晴らしい作品の応募を期待します。



上段：松岡 跡上 岩瀬
下段：中島 森永 高宮 堀田 宮本

好きじゃないひと

高穂 ひさ

三月一日。高校生活、最後の日。

卒業式が終わり、クラスでの記念撮影も済んだ。担任から解散の許可は既に出ているが、教室を去るひとはほとんどいなかった。今生の別れとばかりにカメラや携帯のシャッター音が忙しく切られている。携帯の使用は本来なら校則で禁止されているけれど、今日だけは特例として見逃されるらしく、担任も生徒とのツーショットに笑顔で応じている。

写真が好きでもなければ、撮らないかと誘ってくる相手もない私には不要な時間だ。私はカメラとひとの間を通らないように気を付けながら、使い古したかばんを持って教室から抜け出した。

校舎と外をつなぐ玄関で靴に履き替え、上履きをビニール袋に放り込んだ。もうこの靴箱は、私のもものではなくなる。ほとんどの靴箱に靴が残っている中、空っぽの靴箱を前にすると、本当に終わったのだという実感が胸にじわりと広がった。

外に出ると、騒がしい校舎内と違い人気がなく静かだ。いつもは葉や枝が落ちている並木道が、

式典に向けて整備されていた。だからだろうか、咲きかけの桜がやけに綺麗に見えて、らしくもなくゆっくりと眺めながら歩いた。

正門から出る一歩手前。敷地の境界線を目前に、私は足を止めた。

門の隣には赤と白の花で彩られた看板が立てられている。その祝い事特有の色合いが、三年前、新入生としてこの門を潜った時のことを思い出させた。

ひとりとして知り合いのいない入学式。

新一年生、二百人。

あのとき、彼女はただの二百分の一だった。

二年と半年ほど前、彼女との始まりは、冬と共に訪れた。

* * *

十一月八日。例年この時期に開催されるスピーチ大会の当日。

授業の代わりに、事前に学年から選抜された計十人の生徒がスピーチをするイベントだ。生徒全員が作文を提出し、そこから教師陣の手によってスピーチ者が決まる。私も書いたが、数か月前のことなので内容はもう覚えていない。それくらい適当に済ませたということだろう。

そんな私でも、厳選された主張には幾らかの興味があったのだが、始まってからは微塵もなく

なってしまった。テーマも着地点も似たり寄ったり。正しいことを言っているが、正直、退屈でしかない。

そんな昼寝に適した時間を、眠い目を擦って頑張っているのには理由がある。私の唯一の友人がスピーチをするからだ。選ばれたときには恥ずかしいと不満を垂れていたくせに、「ちゃんと聞いててね」と念を押してきた友人に対して、まったく面倒なやつ、とため息をついた。

「次のスピーチ者は登壇してください」

司会者が無機質な声でアナウンスする。

はい、と響いた返事が聞きなれた声だったので、やっとか、と背筋を伸ばした。

これさえ聞いてしまえば、容赦なく襲ってくる眠気に身を委ねられる。隣で舟をこぐクラスメイトを恨めしく思いながら、隠すことなく大口を開けてあくびをする。

「……このことから、いまだに性差別がなくなっていないことが分かります。改善策として……、……以上でスピーチを終わります。ご清聴ありがとうございます」

適当の塊みたいな友人にも、多少は考える脳があったらしい。性的マイノリティに言及した順当なスピーチを締めくくって、友人が頭を下げる。まだ生き残っている生徒たちがぼちぼちと拍手を始め、その音で起きた者も自然とそれに倣った。私も疲れない程度に手首を働かせた。拍手の規模が下りにかかったとき、友人と目が合った。

はいはい、ちゃんと聞いてたよ。

顎をしゃくって、そうアピールすると、友人が満足げに口角を上げた。

さて、面倒な友人付き合いも終わったことだし、さっさと寝よう。ふあ、と何度目かもわからないあくびをして、パイプ椅子に浅く座り直した。

「次のスピーチ者は登壇してください」

機械的なアナウンスは耳をそのまま通り抜けたため睡眠の妨げにはならなかったが、それに對する返事が聞こえないのが気になった。聞こえなかっただけかもしれないが、もし欠席であれば、ひとりぶん時間が短くなる。それは喜ばしいことだ。寸胴がぶら下がったかのように重いまぶたをどうにか持ち上げる。しかし、次のスピーチ者とやらは、残念なことにきちんと出席していた。

自分が一年生でなかったら後輩だと思うであろう小柄な身体と、飾り気のない無造作なショート黒髪。制服はサイズがあっていかないのか、背後だけ見ても服に着られていて、スカートの裾が歩きたびに重たく翻っていた。登壇のために私たちその他の生徒に背を向けたスピーチ者について、視認出来たのはそれだけだった。

スピーチ者がマイクの前に立つ。初めて見えた顔の半分を覆うマスクはこの場には不釣り合いで、もし全校生徒の面前で礼儀に敵しい教師から何か指摘されたら、さすがに同情を禁じ得ない。私の心配を知る由もなく、小さく頭だけで礼をしたスピーチ者は、長い袖から小さく出た指先でマスクを外した。それをポケットの中に押し込んで、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「宇宙と人間。一年、伊勢 泉」

第一声。やけにすんなりと耳に入ってきた。声量があるというよりは、聞き取りやすい声音とあったほうが正しい。この声がなぜさつき聞こえなかったのか。返事をしなかったのだろうか

そう思うほどだった。

伊勢泉、というらしい彼女は、『宇宙と人間』という題で、宇宙と人間の作り上げた社会を徹底的に比較し尽くした。人間社会がいかに矮小で、霊長類と名乗る人間がいかに傲慢かであるかを語り、容赦なく人間を叩いた。そして宇宙の広大さと神秘をつらつらと並べ立てた。それはまるで宇宙という宗教のプロパガンダのようで、それまで退屈していた私にはひどく劇的だった。

「以上です。……ご清聴ありがとうございます」

スピーチの最後に、取ってつけたようにそう言うと、彼女はまたつむじが見えない程度に小さく礼をした。

ぱちぱち、という音が聞こえて、はっとして私も手を打ち始めた。予想外に強い力で叩いてしまったが、弾けた音は自然と周囲に馴染んだ。最初からずっと寝ていた隣の席のクラスメイトがびくりと身体を揺らして目を覚ます。

それにしても、彼女は人間が嫌いなのだろうか。そうでなかったとしたら、どんな気持ちでこの原稿を書くのだろうか。

壇上から足早に降りた彼女はそそくさと席に戻り、スカートのポケットに押し込んでいたマスクをつけた。そんな彼女の姿をぼんやりと眺めながら、そういうことを思った。

そのままなんとなく彼女を視界に収めたまましていると、アナウンスと共に次のスピーチが始まった。つまらない、どこの誰とも知らない人間のスピーチだ。どうせまた社会問題だとか、生と死についてだとか、小難しい話を小難しい言葉をこねくりまわして喋るんだろう。そんなものは適

当に生きているだけの私にはなんの意味持たない。しばらくつまらない話を右から左へ聞き流していれば、再び眠気がやってきた。

今度こそ落ちてくる臉に逆らわず、私はとうとう眠りについた。

言葉ひとつ、視線ひとつさえ交わしていない。

私知っているのは彼女の名前と声だけ。彼女は私の存在すら知らないだろう。

それでも彼女のことを思うとき。

いつだって、始まりはここなのだ。

二年目の四月一日。春休みの真っ只中。

暑くも寒くもない快適な季節だ。加えて今は春休み、午後になってもそもそも布団から這い出て、スマホやテレビを一日中眺める幸せな毎日を送っていた。

ところが今日に限って、本来なら家で寝ているはずの私は友人と共に学校に来ていた。今日、二年次のクラスが張り出される。昨日の夜、友人から来た誘いのメッセージにはひとりで行け、それが嫌なら他のやつを誘えと返事をしたのだが、度重なる通知に眠りたかった私は根負けしてしまったのだった。

「特進クラスだといひね」

掲示板に向かう途中、友人が言った。休みぼけで重い身体を引きずるようにして歩く私とは対照的に、友人の足取りは軽い。

特別進学クラスはその名の通り、成績の良い生徒たちを集めたクラスだ。文系理系、それぞれひとクラスずつであり、ほぼ変わらない面子のまま三年に持ち上がるので、入ってしまったえば二年・三年と同じクラスになる確率は非常に高い。それを期待しているであろう友人の言葉に、私は重く息を吐いた。

この友人はアホなふりをして実は頭がいい。勤勉なタイプでなく、記憶力の良さで要領よく点を取っていくタイプだ。定期テストの順位で考えれば確実に特進クラスだろう。私はというとそれなりの努力に応じた際どいラインに立っている。

去年友人と呼べるほど仲良くなれたのはこの友人だけだし、違うクラスになるとまた友達作りから始まるので面倒だ。ひとりでも困ることはないが、周りからひとりだと憐れまれるのは嫌だった。だから特進クラスだったらいいと思う。しかし外れたときに辛いので期待したくない。

「……まあ、おまえは入れるでしょ」

友人は私のなげやりな回答が気に入らなかったようで、唇を尖らせて不満を訴えてきた。

「同じクラスだといひね、って話だよ。同意するとこだよ」

「ハイハイ、イッシュョダトイイネー」

「もう、うつみんのばーか！」

友人は子供のように頬を膨らませながら、私のすねを蹴ってきた。容赦なく急所を狙ってくる友人の爪先を、ひざを折って紙一重でかわす。蹴りの勢いが他愛もないじゃれあいのレベルではなかった。初撃は幸運にもかわすことができたが、追撃されたら敵わない。

眉間にしわを寄せる友人の機嫌をどう取るか考えていると、友人が突然「そうだ！」と言って手を合わせた。

「もし同じクラスだったらさ、また出席番号隣かもね！」

さっきとは打って変わってご機嫌になった友人に対し、今度はちゃんと合わせてやることにした。

「まあ、今年もそうだったし、同じクラスだったら可能性あるんじゃない」

「あっ、そういえば数学の課題やった？」

「……やってないけど」

「えー、見せて貰おうと思ったのにー」

せっかく同意してやった私の気遣いを叩き落として、話題を転換した。このやろう。

気ままな友人の態度に今度は私が眉を寄せた。忘れていたようだが、課題の答えが配布されていることはまだ言わないで置こう。恩を売れるかもしれない。そう考えているうちに掲示板にたどりついた。友人曰く十二時に張り出されたらしく、そのおかげか人影はほとんどなかった。

ふたたび並んでクラス分けの紙を覗き込む。

私の学校はひと学年約二百人、ひとクラスが四十人弱だが、文系と理系がほぼ半分に分かれる

ため、六クラスの編成となり、特進クラスには一組と四組が相当する。私も友人も理系なので、特進だとしたら四組だ。

私はまず六組の名簿欄に目をやった。名前はない。次は五組……と視線を動かそうとしたとき、隣の友人が「ああ！」と声を出した。残念そうな声音に。胸がどきりとする。

「同じクラスだけど、続きじゃないみたい」

次いで言われた言葉に、収縮した心臓が緩んだ気がした。五と六の間でさまよわせていた焦点を友人が指さす四組の欄で結んだ。

確かに、私と友人の名前はそこにあった。しかし、友人のいうように間にひとりぶんの名前がある。同じクラス以外に顔見知りの子はいないので、私の知らない子だろう……。

「うへえ、みんな頭いい子ばっかだねえ、滑り込めて良かったー」

「……いせ、いずみ」

「ん？ なに？」

「この、伊勢さんって」

脳裏に浮かぶのは、去年のスピーチ大会。

その壇上で謳う小さな黒髪の女子生徒。

私はその名前を指で示すと、友人が「泉ちゃんがどうかした？」と不思議そうに目を瞬いた。なんだその親しそうな呼び方は。

「なにおまえ、知り合いなの」

「喋ったことないけど、去年選択授業で一緒だったんだよねー。後ろの席の子」

一度も話したことがなくてどうして名前と呼べるのだ。馴れ馴れしさもここまでいけば才能と
言えるのかもしれない。少なくとも私には、泉ちゃん、なんて、一生かかっても呼べやしない。

友人と私の間、紙面上の漢字三文字を、そっと指でなでた。

「伊勢泉です」

マスク越しのくぐもった声は、十一月八日とは打って変わってか細かった。

新年度、新クラスになって、初日にお決まりの自己紹介の時間だ。

彼女は名前だけ言って席についてしまった。次に順番が回ってくる私は、ええ……と戸惑いな
がら立ち上がった。私もこういうことは苦手だが、もう少しどうにかならなかったのか。後に来
るひとのことも考えてほしいものだ。

そう心中で文句を付けながら立ち上がった。

「内海光です。一年間よろしくお願いします」

首だけで浅い礼をして、椅子を引いた。

彼女の自己紹介に一文つけ足したただだが、分量的には二倍以上。これが愛想というものだ。

もっとも、一番最初に自己紹介した友人はもっと。べらべら喋っていたが。

もしも彼女が友人と同じか、ひとことふたこと少ないだけのことを話してくれていれば、私ももうちょっとやりようがあった。好きな食べ物くらいは言えていただろう。

私は脳内でうだうだと愚痴を垂れる。勝手なことを言っている自覚があった。壇上から降りた彼女が私が思い描いていたのとは違って、胸中を失望というべき靄が占めていた。そのせいだろう、いつもなら気にならないことが無性に引かかった。

己の感情を自省しつつ、ちらりと前の席に座る彼女をうかがう。

自分の机をじっと見つめている彼女は、紛れもなくあの日見た壇上の女子生徒だった。一年のときは棟が違ったようで、姿を見るのはその日以来だが、あのときよりもさっぱりとした印象を受けた。これは性格ではなく、見た目の話だ。

もう五ヶ月も前のことになるので曖昧だが、制服につきそうだった襟足がうなじのあたりで切り揃えられている。遠目で見たときはわからなかったが、近くで見ると彼女の黒髪は少し傷んでいた。さらさらというよりもはらはらという表現の方がしっくりくる、縫い糸のような髪だった。手の届かない壇上とは違い、手を伸ばせば届く距離に、彼女がいる。そのせいか、ふれてみたいような、ふれたくないような。そんな心地がしてそわりと喉の辺りがうずいた。私が期待した彼女と目の彼女は違って、そのことは理解しているはずなのに、なぜそう思ったのかはわからなかった。あるいは、壇上の彼女ではないからこそ、ふれてみたいと感じたのかもしれない。

確かなことは、私と彼女はただのクラスメイトで、突然髪にふれることができる関係性ではな

ということだ。

自分でも理解不能な矛盾を抱えながら、私は彼女を見つめ続けた。彼女はというと、自己紹介が後ろの席に回って行っても、見る気がないように一切後ろを振り向かなかった。

私はこの列の自己紹介が終わるまでと決めて、彼女の不揃いな襟足を眺めていた。

「み・す・ぎ」

六月二十五日。中々明けない梅雨のせいで、真昼間だというのに教室も廊下も薄暗い。雨で屋外に出られないため、教室の人口密度がやけに高かった。消費しきれなかった熱量が狭い教室の中で奔流して居心地が悪い。

教室から廊下へ避難した私についてきた友人と、壁に背を預けながらだべる。人間でよかったが、えした教室と、ひんやり湿った廊下。壁一枚隔てただけの空間なのに、とても快適に感じられた。好き好んであの場にいるひとは理解できない。

からりと教室の扉がスライドする。開き切るよりも先に、彼女が外に出てきた。

同じクラスになって気づいたことだが、彼女には気安い仲のひとがいないようだった。クラスの中にはもちろんクラス外のひととも、事務的な会話以外をしているところを見たことがなかった。ひとりで居心地が悪くないのだろうかと思ったが、彼女は一切そんな素振りを見せなかった。

そんな彼女でも、さすがにあの騒がしい空間は居心地が悪いだろう、と扉を閉める彼女を見ながら勝手に想像した。

彼女は俯きがちに視線を床に落としながら、短いコンパスを最大限開いて歩く。ひざ丈のスカートがバサバサと固い音を立ててなびいている。彼女は私たちの前を横切って、職員棟の方へ。

彼女は休み時間・授業中問わず、たまにどこかへ消える。

どこへ行っているのかは知らない。以前さりげなく友人に聞いてみたが、知らないと言われ振られた。いったい、なにをしているんだろう。気になるが、本人に聞けるほどの仲ではない。

彼女の姿が視認できる範囲から消えたところで、友人が呆れたように「見過ぎ」と言った。一音一音区切った言い方がわざとらしい。

「見過ぎって、なにが？」

彼女に思考を奪われるまで、どんな話をしていたっけか。意味のない話ばかりしていたせいで、いまいち記憶に残っていない。私が仕方なく友人に意識を戻してそう問うと、友人は隠すことなく嫌そうな顔をした。

「は、なにその顔」

「ねえまさか、泉ちゃんのこと見てるの、自覚ないの？」

「……伊勢さん？」

確かにさっきはどこ行くんだろうなって思ってたが、そんな顔をされることをした覚えはない。私がそう弁明すると、友人が「うげえ」と顔中のパーツを真ん中に集めた。おおよそ人

間の顔ではなかった。

「……泉ちゃんはたぶん、周りのこと見ないから気付いてないと思うけど、気を付けたほうがいいと思うよ？」

表情を戻してから、友人が珍しく落ち着いたトーンで言った。まさか本当に心配されているのか。

「泉ちゃんのことを好きなのはいいけどさー。理解あるひとばっかじゃないからねー」

友人はもうちょっと隠したほうがいいかもね、と仕方なさそうに言う。

「……いや待て、最後のは何だ」

「ん？なにが」

「他は百歩譲っていいとして、伊勢さんのことが好きって、なんだそれ」

今友人は、間違いなく友情ではなく恋愛感情としての好きのニュアンスで言い切った。疑問に思っているなら、この友人は配慮なしに直接聞いて来る。鎌をかけているとは思えない。つまり、友人は私が彼女のことを好きだと、本気で思っているということだ。現に自分の言葉が否定されると思っていなかったのだろう、友人が「えっ」と意外そうな顔をする。

「違うって言いたいの？ あんだけ舐めるように見といて？」

「見てないし、好きでもない！」

少なくともそういう意味では、好きじゃない。

友人の言葉に反抗して睨みつけると、友人はやれやれといった様子で首を振った。わざとらし

い仕草が癪に障る。それを指摘しようとしたが、「じゃあ質問だけ」その前に友人が私の目を真っすぐに見返したので口から出ることはなかった。

「うつみんにとつての泉ちゃんって、なに？」

そんなの、ただのクラスメイトに決まっている。

即座にそう答えようとしたのに、音が形になることはなく口だけをはくくさせただけに終わった。これでは、まるで私が友人の言葉に動揺しているみたいだ。何を言い淀んでいるんだ、私は。何も言葉が発することのできない私を見て友人はどことなく安心したように笑う。

「ほら、ね。そうなんだよ。うつみんは泉ちゃんのこと、好きなんだよ」

わずかに声を潜めて、穏やかに、友人が言った。まるで正しくないことをした子供を諭しているようだった。いつもとは違う友人の雰囲気、思わず私は押し黙る。

友人が表情を崩した。普段通りの、気の抜けた顔。

「まー、うつみんは素直じゃないからねー、仕方ないね！」

声のトーンも、どこかに調節用のネジがついているのかと思うほど平常だ。張り詰めていたはずの空気も、何事もなかったかのように弛緩している。

平時は隠されている、友人の一面。

たくさんつるめるひとがいる中で、わざわざ私と一緒にいるなんて、変わったやつだとは思っていたが、これがひとの闇というやつなのか。

理由はわからないが、友人がそういうことにしたいなら、ここは譲ってやろう。彼女に恋心を

抱いているとは微塵も思わないけれど、これ以上友人のよくわからない側面を引き出したくもない。

雨が窓を叩く音を聞きながら、またくだらないことを言う友人に苦笑しながらため息をついた。

我が身に起こった予想外の出来事に息を止める。

なんで、こんなことに。

八月一日。地元出身の画家の作品展の初日で、開催記念として作者のトークショーが行われる予定だ。

絵を見るのは好きだが、出不精の私が自発的にこのような場所にくるはずもない。今日は姉に誘われやってきた。そして今、心底ついてきたことを後悔している。

ざらざらと照る太陽光はアスファルトに反射され、頭上と足元の双方向から私を攻め立てる。

太陽だけではない。美術館の外に及ぶ長蛇の列を構成する人間ひとりひとりの熱が、じんわりと伝わってきて気持ち悪い。

屋内でのイベントだと思っていたから日焼け止めも塗ってきていない。直射日光で肌を焼かれる感覚にうんざりとしながら携帯の画面をつける。トークショーが始まるまであと十五分。あと十五分もここで並ぶのは耐えられない。

いっそのこと姉に断って列を抜け、併設されているカフェにでも避難しようか。そう考えていると、前に並んでいるカップルも似たようなことを思ったらしく、するりと列から抜けた。

私もそれに倣おうと、姉に声をかけるべく顔を上げる。目の前で親しげに絡み合うカップルになるべく見ないようにしていた私の脳が初めて、カップルの前に並んでいたひとの姿を認識して、息を詰まらせた。震わせようとしていた喉がからっぽの空気をひゅ、と吐き出した。

伊勢泉、らしき、少女が、そこに立っていた。

予想外の邂逅に心臓が鼓動を早める。耳の内側で響く拍動がうるさい。

姉がカップルの消失により空いたぶんのスペースを詰めた。はっとして、私もためらいつつ、半人分の距離だけ、前に進む。

息を吸って、吐いて、確信する。彼女だ。一目でそうだと断言できなかったのは、彼女が見慣れた制服ではなく、私服を着ていたからだろう。

薄い水色のキャミソールに、デニムのショートパンツ。過剰に露出された腕と足は簡単に折れそうなほどに細く、健康的な小麦色が目に毒だ。足元はベージュの、ヒールのないベタ底のサンダル。手には青色のケースに包まれた携帯が握られている。

彼女の普段の言動から大きく外れた、活発そうな出で立ちだが、彼女の纏うミステリアスな雰囲気と相殺して、子供っぽいとも大人っぽいとも言えない、どっちつかずの印象になっている。学校以外の場所で彼女を見るのは初めてだが、制服を着ていないととても高校生には思えない。なんとなく、俗なものとは離れた印象を抱いていたからだろう。現代美術を俗と言っているの

かはともかくとして、彼女がこういう場所に出てくるのには純粋に驚いた。

絵を見るのが好きなのだろうか。と考えて、私は今朝見たニュースを思い出した。そういえば、この画家のモチーフの多くは星に関連したものだと言っていた気がする。

私は彼女が握る携帯ケースに視線を移した。深い紺色から鮮やかな空色のグラデーションをベースとし、いくつもの惑星や星が描かれた、プラスチック製のものだ。普段のひとを寄せ付けない態度から、てっきり人間が嫌いなんだと思っていたが、ひたすらに宇宙が好きなのだけなのかもしれない。

ふと、彼女の持つ携帯が軽快な音を鳴らした。厳重なパスワードにしているようで、彼女はロック解除のために幾度も画面をタップしていた。画面を開き、二、三度指で画面をなぞる。直後、ふ、と彼女の空気が揺らめいて、それから隣に並んでいた同年代の少女に画面を見せる。その拍子に彼女の横顔が私の目にうつった。いつもの無感情な表情とは打って変わって、目元はやわらかく、まるで笑っているかのようにだった。

それを見た瞬間、頭を金槌で殴られた心地がした。

壇上で高らかに謳う彼女は劇的で。

教室で孤高に生きる彼女は清廉で。

格好良くって、憧れていた。

だからだと、思っていた。

そうでないというのなら、今、私の前に立っている、制服を脱いだ彼女から。宇宙が好きで、

ひとに笑いかけるこの少女から。目が離せないのは。

視界がゆらめく。頭の中でガンガンと音がする。

そうか、きつとぜんぶ、この日差しのせいだ。

生ぬるい汗が、頬を伝った。

背中に冷や汗が滲む。

まずい、まずいと心中で焦る私を知らず、無機質なチャイムが一日の終わりを告げた。

一月十五日。一日の最後の授業に、一週間後に迫った修学旅行に向けたオリエンテーションが行われた。日程は二泊三日で、行き先は北海道だ。なぜ寒い時期により寒い場所へ行くのか、まったく謎である。

配布されたプリントに印字された数字を見て、私はため息をつきたいのを無理やり抑える。女子の出席番号は、一から四番にかけて。つまり、先頭の友人から、私の後ろの番号まで、ひとつくりにされていた。六班と左の枠に記されている。部屋の番号は、三〇一。

「うつみん、同じ班だね、そうだろうとは思ってたけど！」

悶々とする私に対して、むかつくくらい呑気な声を掛けてきたので、後ろを振り向いた。

三学期ともなると何度か席替えも行われていて、その度に教室は一喜一憂しているが、私はと

いうと視力が良くないことを理由に一番前の席を陣取っていた。寝たり内職したりしても教卓に隠れているし、先生が後ろの席の連中に目を光らせていることもあって全然ばれない。なぜ人気がないのか不思議なくらい、快適な席だ。

ふたつ後ろの席の友人が私のほうにやって来る。ちょうどそのとき、同じ列の最後尾を引いた彼女が席からリュックを背負って出ていくのが見えてしまった。彼女はリュックが重いのか、身体をわずかに左に傾けながら足早に教室前の廊下を通り過ぎていった。

「ほらー、また見るー」

友人のからかうような声にまたやった、苦々しく思いながらすぐに視線を外した。

「うるさい」とそれ以上この話を続けるなど睨み付ければ、鼻で笑って私の机に腰かける。

「はいはい。どうしよっか？ 夜なにかするよね？ トランプか花札か持ってた？」

ぱたぱたと足を振って興奮する友人に、「しない、寝る」と冷たく言い放せば、友人は予想通り、「えー」と不満を垂れた。

「せっかくの修学旅行だよ？ 遊ぼうよー」

「昼間みっちりスキーするんだぞ。私の体力考えろよ。力尽きて寝るわ」

「あ、あー。寝そー、すぐ寝そう！ ていうか私も寝そう！」

友人があはは、と笑ったあと、なにかに気づいて眉を下げた。

「でもいいの？ せっかく泉ちゃんと仲良くなれるかもなのになー」

残念そうな友人に、私はいつかのことを思い出した。

『うつみんは、泉ちゃんのこと好きなんだよ』

結局否定できずじまいのあの言葉。友人はいまだ、私が彼女のことを好きだと思っているのだろう。友人がなんと言おうと、私はそんな感情を彼女に抱いていない。近づきたいと思えないのだ。つまり、恋は疎か友愛すらも求めていないということだ。

誤解されているのも不快だが、わざわざ解くのも面倒だ。じゃあどうしてと聞かれても困る。理由なんて私が知りたいくらいだ。とにかく今くらいの発言で収まるなら、このままにしておいてもいいだろう。

なんだかんだと修学旅行について友人と話しているうちに、変な緊張も解けてきた。部屋割りのことをまったく考えていなかったから動揺したが、出席番号の並びを考えたら当然の結果なのだ。それに、ただ同じ部屋というだけで、何があるわけでもない。

そもそも、体育祭や文化祭の当日に彼女の姿はなかったわけだし、そういうイベントへの出席率を考えると、来ない可能性さえあるだろう。

来ない。

そういう可能性が頭に浮かんで、私はふと窓の外へ目を向けた。

雪の気配がひとかけらもない、寒々しい茶と灰の景色。比較的温暖な気候であるこの地域では、雪が降るのは年に片手ほどだ。降ったとしても積もることはない。

来ないとしたら、それは、さすがに残念だと思う。

きっと彼女には、雪が似合うだろうから。

白銀の世界。遠く、点在する人影。

「小学生のとき、東北にいたから」

北海道のスキー場で、彼女は呟くように言った。

一月二十二日、修学旅行の当日、彼女は休むことなく参加していた。そのことに何かしら思う暇もなく、飛行機とバスに長時間揺られ疲れ切ったところに、とどめのようにスキーウェアに着替えさせられた。

スキー研修の班分けは出席番号で前半分と後ろ半分という雑なものだった。

小柄な彼女が纏うあらゆるスキー用具は私よりワンサイズ小さい。それでもなお、ウインドブレーカーにすっぽりと着られてしまっていた。制服のサイズも大きめだが、それ以上にこじんまりとしている彼女の姿に、肺の間が暖かくなるような錯覚を覚えた。

それで動けるのかと思っていたが、完全に杞憂だった。

彼女は班の誰よりうまく、鮮やかに雪の上を滑っていた。

やけに手慣れたその様子に面食らってしまい、彼女に次いでどうにか滑り終えたあと、降りた先に待機している彼女にうっかり尋ねてしまった。

スキー、やったことあるの、と。

その問いを発した瞬間、体温がぶわりと上昇した気がした。スキーで動いたからだろうか。そうでなくとも、これは彼女に話しかけたからでは断じてない。小学生でもあるまいし、たとえ好きなひとと話したとしてもこうはならない。ましてや、彼女は好きな人ではない。

普段動かない身体を無理やり動かしているせいで、心臓がどくどくとうるさい。熱を逃がさない服のせいで、身体が熱い。ゴーグルを外すと雀の涙ほどだがましになった。しかしそのせいで真っ白な雪が反射した太陽光が目まぶしい。

「小学生のとき」

白銀の世界。隙間なく雪積もった山々はひどく幻想的で、ひとびとの楽しい気な声も雪に溶けていく。彼女は戸惑ったように瞳を揺らしながら、けれどその瞬間だけは、確かに私を見ていた。

「そっ、か、それで、そんな上手なんだ」

声が震える。口の中がいやに乾いていた。

彼女が「上手、では……」と曖昧に謙遜したのを最後に、会話は終わった。雪のせいで沈黙がいつそう静かで、彼女からしたら、気まずさを感じているのかもしれない。彼女のことだから、何も感じていないかもしれない。

そんな彼女の隣で、私は宙に浮いているかのような気分だった。

彼女が東北に住んでいたとこの場にいる二百人弱の生徒のうち、どのくらいが知っているだろう。

期待する友人には悪いが、仲良くなる機会はやはり不要だった。たとえ彼女と近づけるチャンスが私にもたらされたとしても、私は必要ないと首を振るだろう。

だってこれだけでいいのだ。

たったひとつ、これだけで満ち足りてしまったのだ。

口の端から息がもれて、白く、揺れた。

部屋全体に満ちた湯気が、視界を白く染め上げた。

「露天行こ」

大浴場の内風呂に浸かって寛いでいると、サウナに行っていた友人が帰ってきて外を指差した。友人は返事も聞かず、浴槽の縁に寄りかかっていた私の腕を引いた。

行かん、と普段なら言ったかもしれないが、なんとなく引かれるまま湯から上がった。滅多にない遠出に、私も浮かれているのかもしれない。掴まれたままだった腕を振り払ってから、垂れてきた前髪をかき上げた。

外に出ると、満天の夜空が広がっていた。

「うわ……」

私が景色に言葉を失っている一方、友人は「すごい、お風呂いっぱいあるー！」と露天風呂に

はしゃいでいた。

「露天が売りっていうだけあるねー!」

「じゃあまずあれ!」と言って先導する友人について、各種露天風呂に入って回ることにした。三つ目から同室の出席番号四番が加わって、三人で回り始めた。最初に後ろの席だったのもあって、多少は親しいのが救いだ。

「なにこれ! 変なかたち」

友人がそういったのは、五つ目の露天風呂だった。直径が私の身長ほどの大きな壺の形をした浴槽は、地元の特産品である焼き物と同一の製法で作られているらしかった。私が長時間の入浴で火照った身体を涼めながら浴槽の脇に立っている説明の看板を一通り読んでいるうちに、友人が早々とお湯に足を入れた。

「これ、三人いけるの」

「んー? まあいけるんじゃない?」

適当に返事しながら友人が湯に身を沈める。思いのほか余裕があったようで、腕を広げながら「はやくはやく」と浴槽の周りを囲む私たちを急かした。温まっていたといえど、北海道の露天風呂、しかも季節は冬だ。段々寒くなってきたので、さっそく私ともうひとりが続いた。三人で入ると流石に足は伸ばせないが、こういうこじんまりしたものも悪くない。

「すごい、表面つるつるだ」

友人がはしゃいで浴槽を触る。その際に身体を反転させたせいで、私の顔にばしゃりとお湯が

かかった。このやろう。私が文句をつけようと口を開いたとき、がらりと中と外を隔てる扉が開いた。

私の真正面にあった扉から出て来たのは彼女だった。

滑らないように足元を見ていた彼女が顔をあげる。彼女を見ていたのが災いし、ばちり、という音が聞こえそうなくらい、しっかりと目が合ってしまった。

あ、と彼女の口が小さく開く。視界の端で、浴槽につかったふたりも彼女を振り向いた。同室の、彼女以外の三人が同じ風呂に入っていて、そこへ最後のひとりが出てきた。

考える間もなく、私は声を発していた。もし考える余裕があったなら、決してこんなことを口にしなかったと確信できる。しかし、気まずい空気を避ける、社会的動物としての防衛本能が、不運にも働いてしまったのだ。

「伊勢さんも、いっしょに入らない？」

私の人生で、この瞬間ほど女という性を呪うことはないだろう。私が女でさえなかったら、こんな事故は起こらなかったのだから。

辛うじて声を裏返えさずにいられたのは、彼女がさほど仲の良くないクラスメイト程度の人間とべたべたするタイプではない、ということ、十中八九、断ってくれるという、期待に似た予想があったからだ。

しかし、彼女は無情にも、こくりと小さく頷いた。

え、と小さな声がこぼれた。幸い彼女には聞こえなかったようで、タオルで身体の前面を隠し

た彼女は、ぺたぺたと水音を立てながら歩いてくる。短いコンパスを最大限に歩く常とは違う、ふつうの女の子の歩き方だ。

浴槽まで寄ってきた彼女が躊躇いがちに左足、右足と足を差し入れ、それからゆっくり湯船に身を沈める。

三人なら肌が触れないように入れるが、四人ともなるとどうしてもちらちらと足先や腕が触れてしまう。

幸い、彼女は扉から一番手前、つまり私の正面に座ったので、足を伸ばさない限りは肌が触れることはない。膝を抱えなおすと、先ほどまで浸かっていた膝がしらが水面から出た。

それぞれが動いてできた波紋が、ゆらゆらと揺れる。彼女のほうを見ないように、と水面に目を向けていたものの、タオルを外して入ってこられては顔を上げるほかない。しかしそうしたとしても、否が応でも彼女の姿が目映る。

彼女は私たちではなく、空を見ていた。そういうことか、と合点がいった。わざわざ露天風呂に入りこくるような性格とは思えなかったが、この景色が彼女をここに連れ出したのだろう。私の誘いに乗ったのは、機嫌が良いための気まぐれだったのかもしれない。

ふいにサイドにわけられていた髪の毛のひと房が、水の重みに耐えられず、束のまま落ちて揺れた。彼女はそれに構うことなく、まっすぐに、宙だけを見つめている。彼女の表情は平静で、しかし、頬だけはわずかに赤く上気していた。その頬を、汗か湯かわからない水滴が伝って、また波紋を生んだ。

……辛い、では、ないかもしれない。

「いやあ、これぞ裸の付き合いだねー」

なんでもないことのように友人がけらりと笑う。いや、実際になんでもないことなのだ。ここにいるのはみんな女子だ。裸がなんだ。なにも動揺することなどない。

私は彼女のことを、好きではないのだから。

心を乱される理由など、ありはしないのだから。

私は素数を順に数えながら、彼女の肩越し、遠くの風景に焦点を合わせた。

彼女の鎖骨に、小さなほくろを見つけた。

ぼんやりと、私の前に整理する友人の頭を眺める。本来、私の前にいるべき彼女とは違う、ちらちらと茶髪の混じった髪。高さも、彼女より幾分か高い。

今日、彼女は学校に来ていない。

彼女が頻繁に欠席したり早退したりする理由はよく知らない。友人も知らないとなればもう私に為す術はなかった。こんなときばかりは、交友関係の狭さが不便に思えた。

そうしているうちにやってきた三月二十日。

今日を最後に、二年生が終わる。

短いようで長かった、高校二年生。直近の大きな行事ということもあって、印象に残っているのは修学旅行だ。あの、非日常のとくべつな時間。それに関連して思い出されるのは、やはり彼女のことだった。

仲良くなりたいたいわけではないのに、どうしてか、あの時間が名残惜しくなってしまう。彼女のことをつい見ってしまうのは、今となっては否定する気も起きない。彼女を恋愛対象として見えないというのは今でも断言するが。

校長のつまらない話に飽きたのか、友人が船をこぎ始めた。

好きでないというなら、どういう感情なのか。

友人からいつか問われたそれに対する答えは、いまだ見つけられないままだ。

意地を張っているわけではない。これでも、これまで何人かのひとのことを好きになってきて、恋愛感情も、付き合いたいという感情も理解できている。理解できているからこそ確信しているのだ。

私は彼女のことを、好きではない。恋愛感情ではない。

かといって友情でもない。家族に抱くような情でもない。ましてや劣情でもない。

素直になって結論が出るならそうしたい。なんにせよ、今の状況よりはましのはずだ。

あるいはどれかの感情に当てはめてしまえばいいのか。そうではないと確信していても、どんなに無理やりでも。

ついに友人の意識が落ちるのが、後ろから見てもわかった。

私が友人の言葉を否定しなかったのは、面倒だからではなく、それが楽だったからなのかもしれない。本当に恋愛感情ならどんなに楽だっただろう。もう、名前があるだけで十分だ。

どうか、だれか、教えてほしい。

私が彼女に向ける感情の、視線の、その名前を。

「お、今年も同じクラスだ。やったね、うつみん！」

隣に並んだ友人が掲示板の紙を見ながら言った。去年と同様に、友人に連れ出された春休み、四月一日。去年と違うのは、断らずに誘いに乗ったことだ。

「おー、よろしく」

掲示板から目を離さないまま、友人と並んだ私の名前を見つめながら、私は友人にそう返した。

「残念だねー」

察していると云わんばかりの、確信めいた口調の友人を、じろりと睨む。

「元氣出しなねー。ジュースくらいなら奢ってあげるよ？」

「いらん」

強く断ってなお背中を軽く叩いてくる友人の手を振り払う。

わかっていたことだ。三年でも特進クラスに入るには、彼女は出席率が悪すぎた。もちろん私が特進クラスに入れない可能性もあったが、今年もどうにか滑り込めたらしかった。

しかしそう反論すれば、彼女の話かどうかは言っていない、とか言ってからかわれるに決まって

いるのだ。私が友人の軽口を放置してやっていると、調子に乗った友人が身体を折って私の顔を覗き込んできた。

「なんなら、特進クラスじゃないほうが良かったか思ってたりして」

「うるさい」

差し出された頭を、ご要望通りぎちぎちに締め上げてやった。

そうして私は三年目を迎えた。

クラスが違うのは、一年目と同じこと。二百分の一の彼女がいなくなったところで、私の日常は不変に回りうる。

そのはずなのに、彼女はすでに二百分の一などではなくなっていたらしい。

彼女のいないクラスで訪れる、これまでの人生史上、最も多忙な月日。机にかじりつく毎日の中ですら、彼女の姿はいつも視界にちらついていた。

遠くから見ると周囲に埋もれてしまうほどの小柄な彼女を、すぐに見つけ出してしまう自分が嫌になる。

受験勉強の逃避ついでに、彼女のどこに、こんなに惹かれるのかと考えたことがあった。

正直、顔は不細工でこそないけれど、特別整っているわけではない。何より愛想が良くない。

ミステリアスな雰囲気ではあるけれど、人間臭く笑うこともある。

クールかと思いきや、生き急ぐような歩き方はそれとは程遠い。

めいいっぱい開いたコンパス。

ひとの少ないほうへと逃げる視線。

揺れる無造作な黒髪。

リュックを背負ったとき、左肩が下がる癖。

どれも、魅力的とは言えない。言えないはずなのに。

それなのに、どうして。

* * *

三年間、私と彼女の間になにがあったのか、と聞かれれば、正直何もなかったというほかない。私と彼女は、だれがどう見ても、一年間同じクラスだっただけの同輩だ。

目を閉じて、先ほど通り過ぎた靴箱のことを思い出す。

未練たらしく探した、隣のクラスの出席番号一番。そこにはすでに靴も上履きも入っていないかった。それが終わりだった。

私の高校生活の終わり。そして、私と彼女の終わり。

言葉も視線もなく始まって、起伏のない日々を過ごし、そして最後の最後まで、なにもありはしなかった。わからないことだらけで自己完結すらできなかった。

「うっみんな、こんなとこにいたんだ」

後ろから声がかけれられ、仕方なしに振り向くと、胸に赤い花をつけた友人が立っていた。近づかれていたことにまったく気付かなかった。

「うつみんも感傷に浸ったりするんだねえ」

いつから見ていたのか、友人がからかうように笑った。それが不快で眉をひそめると、友人が声を立てて笑った。うるさい。

「そういうおまえは何しに来たわけ」

「泉ちゃん、東北の大学に行くらしいね」

「……質問と答え、合っていないけど」

「残念だねー」

「だから……」

会話になっていない。私はそう文句をつけようとして、口をつぐんだ。さっきまで笑っていた友人が、ひどく悲しそうな顔で私を見つめていた。

友人が、私に、私の彼女への感情に、何を求めているのかは知らない。知る必要も、友人の言葉を否定する必要も、ないと思っていた。それが互いのためだった。

けれど、その表情がすべてなのだろう。

友人はきくと、ロマンチストだったのだ。

「ね、うつみん。どうせこの後暇でしょ？ ご飯食べ行こうよ」

いつも通りの呑気な声なのに、慰められているような気がした。

別に、慰められることなんてなにもない。数えるほどしかない挨拶ができる人間と離れることもあるだろうが、それで悲しみに暮れるほど可愛げのある性格はしていない。

私の隣に友人がやってきて、眉を下げて笑った。

「泉ちゃんじゃなくてごめんね」

「……だから、なにも言っていないって」

想定していたよりも不満げな声が出て、思わず顔をしかめる。

じゃあ、行こうか。そのことについてなにも言わず友人はただ笑って歩き出した。後ろにいた友人が私に並んで、ついに通り越した。

飽きるほど見た、友人の後ろ姿。その間に存在したはずの彼女は、もうここにはいない。

一步、外へ。

生まれたのはアスファルトとローファーがぶつかる無機質な音だけだった。

でも、それでよかったのだ。

私は学校を振り向いて、あーあ、と息を吐く。

「不毛な高校生活だったなあ」

そう言って笑えば、春風が冬の終わりを告げた。

財布なんざ常に領収書でいっばいだ

南藻 ナイ

基本的に僕はだれかと一緒にいるということができないのだな、なんか、そんな気がする。

たいがい、そういう自虐的あからさま暗い思考というのは高等部までに済ませておくべきもので、成人を目前としていまだそんなことを言っているのはどうなんだという冷めた自分の声が後頭部から聞こえてこないでもないけれど、付き合っていた女の子に振られるのも三回目となると、さすがに、ちょっと、しんどい。

へこんだ心を無理にふっくら持ちあげようとして、コンビニでクリームぱんを買い占めてみた。疲れると無意味に無意味なことをしたくなる、この人間心理。秋の空は起伏なくすっきりと青色で、薄荷の香りが漂ってくるほどだったらしく、見あげていると鼻の奥がつんとした。

なんらかのサークル的活動の買いだしなのじゃないかと気を利かせたコンビニ店員さんが、レジ袋にパンを詰めこみながら、領収書を出しましょうかと僕に訊いた。恥ずかしかった僕はい

と答え、まったく意味のない領収書をもらった。家に帰り、人間の小ささと空しさに涙がでた。あれからひと月経ったが、あのときの涙が染みこんだ領収書はいまだに僕の財布のなかに入っている。そういう人間の話である、これは。

※

世のなかで、失恋というのが、どの程度つらいものとして位置づけられているのかわからない。ともだちに相談してみたら、三回も女の子と付き合えたならいいじゃないかと言われたので、二度と訊かなかった。きさま他人の痛みを理解しないやつはろくでもないんだぞ、と説いてやろうかと思案したけれど、ともだちまで失いそうな気がしたので、やめた。英断だったんじゃないかとおもう。

靴裏でぱりぱりと薄紙をまるめるような音がした。歩道のあちこちに落ち葉が転がっている。赤やら黄色やら、暖色系系統のわりに、妙にかわいている。石畳のすき間には、割れた落ち葉の破片と暗緑の苔がつまって、きたないモザイクができていた。

ひとりだった。
ひとりになると、ちょっと、どこかへ行きたくなる。

身軽になったぶん、遠出したくなるのか、停滞に耐えられないというたんなる人間の悲しい性なのか、どちらが原因なのかはわからないけれど、とにかくここ最近の僕は無性に旅にでたくて

仕方がなかった。

北国に謎の憧れをもつ僕は、思いきってカナダ旅行を計画してみた。パソコンと電卓をたたいてみたところ、往復に最低でも十二万はかかるらしいとわかった。ちなみに、僕の貯金は十五万円である。つづいて僕は、こんなさみしい傷心おとこひとり旅に自分の財産ほぼすべてをかける価値があるかどうかを検討してみた。というか、検討するまでもなかった。

で、近所で手を打つことにした。具体的にいうと、徒歩にして四十分先にある水族館まで、カナダ感のある動物、すなわちシロクマとビーバーを見に行くことにした。しょぼい。が、仕方がない。金がないのだ金がない。

白い毛むくじゃらでのそのそと動くクマさんをおもいうかべながら、くすんだ道をのろのろ歩いていると、浅黄色の綺麗なスカートと革靴を履いた女のひととすれちがった。とおりすぎる瞬間、ふわっと薬品漬けの花の香りが風になって僕をふきぬける。それでついうっかり、セイコさんのことを思いだしてしまう。

「君ってさ、自分のことしか考えてないよね」

別れぎわのひとことである。わりときついタイプの。

「え？なにが？」

僕のマヌケな返答である。その後、とくに紆余曲折もなく、振られた。

元カノのことでいつまでもよくよくするのは、おそらくこの世で二十三番目くらいには情けない行為なのではないかと推定するが、どうしてあのセリフがこんなにもこたえているのかという

と、それは真実をつかれたからにはかならない。

僕はたしかに、自分のことしか考えていない。

……だんだん、本格的に気持ちが悪く落ちこんできたので、僕はそれ以上セイコさんの声を脳内再生するのは止め、茶色い毛むくじゃらでちょこちょこと泳ぐネズミさんをおもいかべながら、かすれた横断歩道を小走りで渡った。信号の明るい緑が点滅し、車のフロント・ガラスに歩くひとの影を映しては消していた。

点字ブロックの凹凸に蹴躓きながら、排気ガスのざらざらにこもった臭いと音を吸いこむ。最近、運動していないから、ほんの少し走っただけで息が切れていた。秋の空気は冬のころほど乾燥していなくて、肺に冷たい水を流しこんだような気もちがした。

街路樹と駐車場の向こうに、水族館の案内看板と、都会の雨にうたれ、どことなく薄汚れたペニンギン像がみえた。三連休である。家族連れとカップルのすがたが多いことに気づく。

一瞬、激烈にこのまま帰宅するほうがかたむきかけたけれど、わずかな癒しを求め、シロクマとビーバー、シロクマとビーバー……。とつぶやきつつ、僕はふらふらと敷地内に足を踏み入れた。完全に、危ないひとだった。

※

「カシオくん、こういうの嫌いでしょ」

いつだったか、セイコさんと一緒に駅の売店に立ち寄ったとき、彼女が唐突にまねき猫型の鈴が付いたペア・ストラップを指さしてそう言ったことがある。

「うん。まあ、え、なんで？」「いやなんとなく。イメージが」「なにそれ」

「かわいいのになあ」セイコさんはむきだしになった薄い耳の端っこをつまんだ。彼女は後ろ姿だけだと男性に間違われるくらい、髪が短かった。僕は弁明した。

「だってなんか、記号的じゃなか。ペアならとかイヤホンの半分ことか。デモンストレーションというか。べつにその行為がお互いに対する好意のなにを保証するわけでもないのにそういう外面的かつテンプレなものに頼ろうとする、その魂胆が気に食わん」

「ようするに恥ずかしいだけだろ」「うん。まあ」

「でもさ、ほいことをしたい、ってそんな悪いことじゃないでしょ。大阪行ったらそこ焼き食うじゃん。グリコの看板の前で両手片足あげて写真撮るじゃん」

彼女は耳から指を離して、つぎはほっぺたをつまんだ。「つーか好意の保証ってんならそんなもんなにをもってもできなわけだ。だったら目に見えるほうがいいよ、っておもうのは自然だよねえ」

「……あれ、欲しい？」

「いや、じつはそんなに興味はない」セイコさんはストラップを爪で弾いて鈴を鳴らした。空気がうごき、彼女の色水みたいな儂い香りと、曇ったような冴えない音が僕に届く。「だがかわいい」

そんな会話を思いだしたのは、水族館の入口に置いてあるショップ・コーナーにペア・ストラップが並んでいたからだ。イルカとシロクマの二種類。紐と海色のとんぼ玉、金具のさきに手のひらサイズのぬいぐるみがぶらさがっていた。磁石が入っているらしく、対になった二つはくっついている。

当たり前かもしれないが、ビーバーはいないらしい。いなくてよかった。もしもそろっておいであつたら、勢いあまって購入していた可能性がある。僕は未恐ろしさを感じつつ、互いを抱きしめあうようにくっついているシロクマのぬいぐるみに手をふれた。ぼろっと二頭がはずれた。……磁力よわくないか？ いいのかこれで。

「ねー、はやくいこーよ」

ふたたびシロクマたちをくっつけようと躍起になっているうち、人波の向こうでこどもの声が出た。それで我に返ったというのでもないけれど、僕もとっとと今日の目的を果たすことにした。指の腹にあたるふわふわの感触を未練がましくひきはがし、青暗い明かりの落ちる通路へ入る。

天井からぶら下がったライトがほの白く、床に輪郭の曖昧な幾何学模様を貼りつけていた。ぎゅむぎゅむとゴム底の音をたてながらスロープを下ると、いきなり、視界いっぱいにはガラス張りの海が光っている。

水槽前で群れるひとの影が黒かった。音もなく、あぶくともにも小型のサメが白い腹を見せながらすべっていった。イワシの大群の鱗の銀がなんとなく安っぽい。魚をみつめる人間の目と、

身につけている金属だけが、暗がりのなかで、ときおり裏返るようにとがった光を反射する。

ちょっと、こわかった。ひとがこわい。なるべく関わりあいになりたくない。すれ違うひとに「ちょっと通してください」とへこへこしたり、肩をこすらせて「あ、すみません」とへなへなした声であやまったり、「写真撮ってください」と頼まれ「いいですよ」とへらへらした笑みをつくったり、そういうぜんぶが面倒くさくてしょうがない。

自業自得とはいえこのひと月というものの、僕の心はもうへとへとなのだった。正直、疲れた。いったん、さぼらせてほしい。

と、いうわけで、三步先にいるデジカメをもったお母さんがなにかしらの頼みごとを抱えて近づいてくる気配を敏感に察知した僕は、じつにさりげないふうをよそおい、いそいそと水槽のまえから距離をとった。ところが急に動いたせいで、走ってきたこともにぶつかってしまう。

「あ、すみません」

とっさに、六歳くらいの子さいさい女の子相手に馬鹿丁寧な口調であやまる僕。馬鹿クソ恥ずかしい瞬間である。

女の子のほうはとくに気にする様子もなく、澄んだ無表情で一瞬、僕と目をあわせ、そのままなにごともなかったかのように短い手足で走り去っていく。背中の蛍光ピンクのリュックがゆれる。そのとき、リュックに結び付けられた二つのぬいぐるみのうち一つが、ぷつんとちぎれてころがった。

「あ」呼びとめる声を発するまえに、デジカメのお母さんにつかまる。ちくしょう、という感情

はおくびにもださず、へらへらとカメラを受け取り、かまえた。目の前の家族ではなく、いっそ背後のハゲ親父の頭でも大写しにしてやろうかとおもいつくが、実行はしない。度胸がないというより、デジカメというのは撮影直後に撮った写真を確認するものだからである。僕は、怒られたくはなかった。

つつがなく家族写真を撮影し、お母さんが明らかに目をつぶっていたことはふせたまま、カメラを返却した。画面が小さかったおかげか、リテイクは要求されずに済む。

ふたたびひとりになり、床にころがっているぬいぐるみながめて、どうしようと途方に暮れた。すでに蛍光ピンクのリュックの影はどこにもない。……まあいいか。ころがしておけ。迷子になったときはその場から動くなっていうしな。

そんなふうになかで適当な理論をならべ、素通りしてシロクマとビーバーのもとにむかうとしたとき、ふいに脳裏にセイコさんの声がよみがえった。

「君ってさ、自分のことしか考えてないよね」

くっそう。泣きそうだ。

観念して、床に落ちるちっぽけな影にちかづき、身をかがめ、僕はぬいぐるみを拾った。かく握りつぶしてみる。ふわふわの感触がゆびの間に染みこむ。よくみたら、入口のショップにあったペア・ストラップのシロクマ、そのかたわれだった。

※

落としたものとセイコさんというのと、どうしても思いだす記憶がある。

「あの」

大学で階段をのぼっている途中、頭上から声をかけられた。踊り場に髪の短い女の子が立っていて、片手にプリントをつまんでいた。そのさらに頭上から真昼の白い光が差しこんでいて、彼女の薄い片耳と片頬を赤っぽく透かしていた。

「これ、君のでしょ」

彼女はまぶしい光を遮るように、僕のほうに向かってプリントをかかげた。藁半紙に陽があたり、なかに散らばる繊維が血管みたいに浮かびあがっていた。目を細め、書きつけてある文字を見てみれば、たしかに僕の筆跡なのだった。

「あ、わ、ほんとだ」「しかも、つぎの講義の提出課題」「あわ！アホだ」

狼狽しつつもお礼を口にし、僕は手をのばしてプリントをうけとった。

「どこに忘れてました？」「学食だけど」「てか、よく僕のってわかりましたね」「おんなじクラスじゃん」こともなげにいうので、驚く。

「え。でしたっけ。だったっけ。記憶力いいね」「いいというか。こういうときのために、名前と顔くらいは」「こういうとき？」

いままでずっとまっすぐな目をしていた彼女が、そのときはじめて視線をそらした。あまりひとに理解されないことを語るように、言葉を選びながら、ぼつぼつと階下に落とした。

「落としものとか、忘れものとか。あとは、ポイ捨てのごみとか。なんか、あんまり、スルーできないタイプで。拾ったら、絶対、めんどくさいってわかってんだけど」まばたきを繰り返して、真面目な顔つきのまま、照れたように頬をつまむ。「で、覚えられるひとくらいは覚えとこうとおもって」

「へえ」と気のなさそうな返答をしながら、僕はひっそり感動していた。それから、優しいことと優秀であることは似ているのかもしれないと、きっと、彼女はほんとうに優しいひとなのだろうと、信じた。それがつまりセイコさんであり、セイコさんとの出会いだっただけだ。

拾ったシロクマくんは、ショップに並んでいたものよりかなり古びているようだった。手触りこそ新品と変わらないものの、白い毛皮がえんぴつをぼかしたような灰色になってしまっている。ながいこと、大事に付けていたのだろうとおもった。蛍光ピンクのリュックサックを頭に浮かべる。

あれだけ目立つ要素があれば、みつけるのは容易だろう。こういう場合、水族館のすばらしいところは、動物園とちがって順路がきちんと決まっているところだ。おまけに、僕のほうはシロクマとビーバー以外、とくに興味はないのだ。つまり、このままなんの芸もなく順路をたどっていったところでふつうに追いつく。なんだ、ぬるいゲームじゃないか。ぬるゲーじゃないか。そうおもった。

気を大きくした僕は、シロクマくんを右手に握りこんだまま、なんの芸もなく順路をたどって

いくことにした。

クラゲの水槽がならぶ通路に入る。曇った薄青の水のなかを、まるっこい半透明がふにふにと泳いでいく。埃なのか微生物なのか、水中を漂う白い屑が、ぼんやりした照明にうかびあがっている。そんなあやふやで軟弱な生物のことは無視して、あざやかな蛍光ピンクだけを探す。いない。よし、つぎにいこう。

そんなまわりかたをしているうち、いつのまにか、順路も後半にさしかかっていたらしい。急に視界が明るく開けた。

とつぜん、まだらに暗いところから均質な光のなかに放りこまれて、目の奥に水が溜まった。何度もおおげさなまばたきを繰り返し、痛みと曇りがとれるのを待つ。ひとの多さに目を剥く。話し声と吐く息と衣擦れとがごった返して、眠る直前の耳鳴りみたいにならついた喧噪が、その一角にだけふきだまっていた。

なにが起こった!？と動揺していたが、ふと、そこがシロクマの観覧場所であることに気づく。なるほど、シロクマか!と納得はしつつも、どこか解せない。……みんな、シロクマ好きすぎないか?僕が言えたセリフではないけれど。

なんにせよ、本命である。当初、頭のなかで勝手に想像していたような、ただシロクマとみつめあってぼんやりと数時間をすごすという、無為にもほどがある計画は放棄しなければならぬだろうが、すくなくともキュートなお尻くらいは拝もうときめた。うっかりひとの足を踏んでしまわないよう、床をみつめてそろそろと人波に混じった。

水色のペンキが塗られ、潤ったような床に、蛍光灯の光と僕の影が波うちながらうつりこんでいた。ひとびとの靴の合間に、ぺたんこになって足跡がついたくしゃくしゃの入場券と、破けた金柑のど飴の個包装がおちていた。どうあがいてもこれ以上進めない、というところまできてから、顔をあげる。

……みえない。ひとの頭が邪魔してみえない。

一分ほどそのままの姿勢で待ってみたが、前方のひとたちが動く気配はなかった。

だんだん、つつ立ってるのが恥ずかしくなってきたので、ここは潔く、あきらめておくことにした。

まあいいさ。どのみち、クマのお尻をちら見した程度のこと、僕のなかのなにかがどうにかなるわけではなかったのだ。ぬいぐるみを拾ったことでなんとなく会った気になっていることも事実だ。ビーバーに賭けよう。

ちょっとだけ、かなしかった。奥のほうに階段があり、おそらく頭上からも観察できるようになっていたのだらうとあたりをつけたが、そこまでのぼろろという気もしない。蛍光ピンクのリュックもない。ひょっとしたら二階にいるのかもしれないけれど、だとしたらそのうち降りてくるのだ。さきに行って、見あたらなかったらそこで待ちぶせしていればいい。

そろそろと、極力、ひとにぶつからないよう、ひと混みから自分を抜いた。今、この場にいるだれもにとって僕は邪魔だ。からだの体積がなくなればいいのに。うつむき気味に、早足で歩いた。

※

しょぼい。なんの感想かというと、ビーバーの感想だ。

手すりに二の腕をのせ、肺を潰すつもりで胸を押しつけた。息がしづらくなる。生きづらくなる。プールのなかでは大きなネズミがぐるぐると慌ただしく泳いでいた。硬そうな毛の奥に水が染みこんで、色が深い。足が跳ねて水が泡立った。何本かの木材といっしょに、ガラス玉みたいな泡がくっつきあいながら水面を漂っていた。

そとに飛びだしている黒い鼻面と、平たいしっぽを眺める。変な生き物だなあ、とおもった。人間ほどじゃないだろうが。

北国感はない。あたりまえだ。ここは日本だ。そこまで考えたところで、それ以上の感想が浮かばなくなった。僕は欠伸をして、握りっぱなだったシロクマくんを顔のまえに持ってくる、手足をつまみ、盆踊りを踊らせてみた。

指さきの綿の感触、淡いプールの匂いとくっきりした獣の臭い。この部分はもうほとんど出口で、黄ばみの張りついたガラス窓からあたたかい日の光が差しこんでいた。なんだか思考がぼやけてくる。

なんのためにここに来たんだっけ。癒されたかったのか、なにか区切りが欲しかったのか。救われたかったのか。意図して自分を助けるのも他人を助けるのも難しい。うまくいかない。どこ

にも行けない。

かわるがわる、何人かが背後からやってきて、はしゃいだり写真を撮ったりした。シロクマくんの主人は、まだこない。

どのくらいぼんやりしていたのかわからない。ふと腕時計を見てぎょっとした。これはいくらなんでも時間が経ちすぎなのではないか。おかしい。急激に、焦りが襲ってきた。心臓の奥でピーパーがぐるぐるしているイメージを抱え、じんわり瞳孔が開いてくるのを自覚しながら、そっと冷たい手すりから身を離す。

いったん、外に出てみることにした。ぬいぐるみを握る右手がこころもとなかった。口のなか
が渴いてきた。出口をくぐる。

外は薄暗く、空の低い位置に、幼児のぬりえのような適当な雲が灰色になって垂れこめていた。やたらと空気が湿っぽく、もう秋も深いのに肌が汗ばむ。煤けた臭いのする風がいつもより強く、いままさながら台風が近かったことを思いだした。振り返ると、チラシやらカレンダーやらが貼りつけてある掲示板が目に入った。そのなかに、イルカショーの案内をみつける。……イルカショー？

そんなもの、やっていた覚えがない。いったいどこで、と顔を近づけてみると、シロクマのいた部屋の二階部分が、ショーをできるドームにつながっているらしいとわかった。僕がシロクマのところに行った時間あたりに、ショーをやっていたらしいということもわかった。ちなみに、ドームは別館扱いで、直接、館外にでられるらしいということもわかった。

そういうことかよ！と心のなかで叫ぶ。ひとがあそこにとまっていたのはイルカショーのためだったのだ。べつにシロクマが大好きなわけではなかったのだ。あたりまえだ。つまるところ、おそらく、ぬいぐるみの持ち主である蛍光ピンクのリュックの少女は、ショーだけ楽しんだ後、別の出口からとっとおうちに帰ったのだろう。

さらに、もうひとつだけわかったことがある。僕は失敗した。原因はひとつ。芸がなさすぎたのだ。ショーだけに。

※

「君ってさ、自分のことしか考えてないよね」

そのときセイコさんは、僕の目のまえであぐらをかき、ラーメン鉢に箸をつっこんでスープをかき混ぜ、底に沈んだ具を探していた。

「え、なにが？」「なにが、じゃなくってさ」

僕の部屋でふたり、遅い昼飯にラーメンを茹で、ほとんど食べ終わったところだった。どういふ会話の流れでそうなったのかはもう記憶にない。ただ、そこに至るまでの言葉の選びかたに気が配ったところで、すでにいろいろと手遅れだったようにおもう。

風が吹き、窓の薄いカーテンがゆれた。彼女の頬に落ちていた布目越しの光も、さざ波みたいにくらめいて、音も無く影が流れた。

「なんていうんだろう」彼女は目線を下に落としたまま、一心不乱に箸で鉢の底をつついていた。「他人のことになるとさ、カシオくんって、全然、がんばらないよね」

「……」反論ができなかった。なにも言い返せない僕は、ただセイコさんの赤茶に透けるまつげと、白く滲む耳たぶを眺めていた。セイコさんは普段、こちらが恐怖を感じるくらいにまっすぐひとの顔を見て話すくせに、大事なことをしゃべるときほど目があわなくなる。ほんとうのことだとか正しいことだとか、そういう言葉をまっすぐ向けられたときの、ひとの痛さや重たさをおかっているから、視線だけでもそらそうとする。すこしだけ優しくしようとする。

そこが好きだった。すげえ好きだな、とおもっていた。今も、おもっている。

「君はさ、たぶん、他人が自分のためにがんばってくれたときも、べつにどうでもいいのに、っておもってんだよね。自分ががんばらないから」

「……」

「よくないよ、そういうの。じつによくない」

やがて、セイコさんは静かに僕らの恋人関係の終わりを告げ、部屋をでていった。僕はしばらくぼんやりし、ぼんやりしたまま流し台に立って、ふたりぶんのラーメン鉢を洗った。針金が交差し、いくつものバツ印がならぶ目の前の擦りガラスをおして、朱色の西日が熱とともにシンクにうつった。器に残っていたスープを流すと、油と調味料のにおいが煙のようにたちのぼった。セイコさんの器には、麺一本、残っておらず、すべてきれいに食べつくされていた。

それに気づいたとき、彼女が拾ったプリントを僕に届けてくれた真昼の階段を思いだした。い

まさらながら、ひょっとして、自分はとんでもないひとに見放されたのではないか、と思ひあたり、愕然とした。

一周まわって、どうでもよくなってきた。そもそも、はじめから僕に責任のある話ではなかったのだ。失敗したところで、僕を責める者はだれもない。

われながらひどい考えかただとはおもうが、知ったことか。自分勝手にそう断じて、僕は手のなかのシロクマくんを持てあましたあげく、水族館の敷地内にある花壇のへりに座らせておくことにした。運がよければ、優しいだれかが拾ってくれるだろう。たとえばセイコさんみたいな。

枯草と栄養のなさそうな土をバックに、花壇の煉瓦にぼつんと腰かける、頭からちやちな金具が生えたシロクマのぬいぐるみを見おろす。

結局、ひとりだった。

身をひるがえして、足早に離れた。綿の真っ白なやわらかさが指のあいだにしつこく絡んでいった。それをごまかしたくて、てのひらの皮が破けそうになるほどつよく爪をたて、シャツを握りしめた。力をこめ、すり減った靴裏で枯れ葉に足跡をつける。

歩道に潰れた金柑がへばりつき、甘ったるい胃液の匂いを発していた。電線が沈みこむようにたわむ。湿気をふくんだ風がばたばたと鬱陶しい。まるでまとわりついてくるだれかに服の裾をひっぱられているようで、歩きづらい。

自分がゴミすぎて、いろいろとぜんぶ嫌になってきた。頭の奥が痺れてくる。さては馬鹿だろ、

僕。脳みそ足りてないんじゃないのか。しんどい。五百年くらい眠りたい。生きるのをさぼりたい。

本当はもう何年も前からわかっていた。僕は優秀ではない。優しくはない。どうあってもセイコさんのようにはいられない。うつくしいひとにはなれない。

むせかえるほどに、雨の気配が濃くなってきた。たっぷりと雲がぬりこめられた空を見あげる。頬のうえに点を打つように、一瞬、冷たさが浮かんた。まもなく、ぱたぱたと遠くのほうから都会の汚れた水が落ちはじめた。

あこがれていたのだ。本気で好きだったのだ。そんなひとのためにすら、僕はなにひとつがなげなかつた。僕は知っている。この世のなか、彼女のような人間はどっかでひどく生きづらい。そばにいたかつた。だけど、自分本位で怠惰な僕は、彼女の味方にすらなげなかつた。

僕はいったい何回、だれかを泣かせたら気がすむだろう。何回、いらだたせたら気がすむだろう。ただでさえ生きるのは大変だ。悲しいことはなくならない。苦しいことはなくならない。理不尽な世界。やるせない世界。何回、だれかが泣いたら気がすむだろう。何回、壊れたら気がすむだろう。もう勘弁してほしい。だれに言ったらいいのかわからない。

あつというまに視界が白くけぶつた。道路で雨が跳ねて、路面にいくつもちいさな十字架が立った。あわてて、近くのビルの駐車場に飛びこむ。

マネキンみたいにつっ立って、マヌケみたいに雨がよわまるのを待った。雲がつくった薄闇よりももうひとつ濃い影のなかで、僕がつけた雨の足跡がてらとひかつていた。街全体が、電

波の海の砂嵐の音につつまれていた。もうなんにも聴こえない。

じっとしていると寒かった。とおくの北国のことを考えた。シロクマのことを思いだした。

あいつは、このひどい雨に打たれているのだろうか。どこにも行けないで、なにも言わないで、いのちも持たないで。そもそも、濡れて大丈夫なからだなのか。もしかしたら、風で飛ばされてしまったかもしれない。

あんなへんなところにおいてきぼりにするんじゃないな。いまさらおせいけど。

.....

いまさらおせいけど。

雨は降り続けている。

いまさらおせいけど、.....

雨は降り続けている。

いまさらおせいけど、.....拾いに行くか？

僕は、息を止めた。

意味もないのに、三步、さがって助走をとった。ほんの数ミリ、砂利の音を立ててかかどが削れる。膝に熱をこめる。つま先に力をこめる。腹をきめて飛びだした。

大粒の雨が痛いくらいに肌をたたいた。肺がいっぱいになるまで、細かなしぶきを吸う。すきかけの和紙みたいな濁った香りが底のほうにたらたらと沈みこむ。

ひと粒のまるみを感じるほど重たくなった水が、すき間なく僕をうめつくした。ひとの指では

らばらと触れられているようで、神経にさわる。ふりきって走る。シャツがずぶ濡れて、綿の生地がまだらに褪せていく。胸の奥が冷えていく。手の甲の骨がつくったちいさなくぼみに水が溜まり、不安定に震えているのにふと気づく。

心臓のリズムと少しだけずれた、こめかみで鳴る血流の音が重かった。息がかすれて喉が氷の味に焼けていた。走りながらふり落とされた水が、僕の視界の端っこで薄青の糸になる。

目のなかにつぎつぎと雨水が垂れおちてきて、前なんかろくに見えない。ちっぼけな水溜まりさえよけずにつっこんだ。排水溝に流されていく、もろい泡と砂にまみれた萩の葉を蹴散らす。スニーカーが水を吸ってぐじゅぐじゅと鳴いた。知ったことじゃなかった。

なんども腕で顔をぬぐった。服も靴も濡れれば重みを増していくのに僕のからだだけが水になじまない。吸ってしまえよ、と吐き捨てる。雨を吸って半透明にふくれてそのまま溶けてしまえばいい。もうおまえなんかクラゲだ。おのれを罵倒するいきおいで自問する。

あいつを拾ってどうするんだよ。どうしようもないじゃないか。そもそも、僕が一人でじたばたしているだけじゃないのか。そんなにたいしたものではないかもしれない。あの女の子も、なんとなくずっとぶらさげていただけかもしれない。たかがストラップだ。すべては壮大なる無駄足なんじゃないのか。濡れ損なんじゃないのか。僕はいったいなにをやっているんだろう。

だけど、このままではいたくないのだ。綺麗じゃなくても優しくなくてもどうしようもなくとも、馬鹿でも最低でも努力が足りなくても、僕だって悲しいことは嫌いなのだ。泣いてるひとなんかみたくない。ひどいことなんかおきてほしくない。叫びたい。暴れたい。だれかのために走

りたい。

これが僕の気持ちのなにを保証してくれるわけでもない。ただの言い訳でしかない。そんなことはわかってんだ！

世界に意味を付けるのはこの僕だ。

世界に言葉を与えるのはこの僕だ。

世界に色を付けるのはこの僕だ。

世界に心を与えるのはこの僕だ。

他のだれでもなく僕だけなのだ。

今、僕が雨に打たれている意味、息を切らして走っている必要、そんなものはどこにもない。すべては僕がきめていい。

「君ってさ、自分のことしか考えてないよね」

ああ、そうだとおも。

シロクマくんは、花壇のなかにさかさまになって落ちていた。

僕はささくれた息を吐きながら、冷えた泥に指をつっこんで、拾いあげる。真っ黒い泥水が耳のさきから滴った。ごめんよ、とつぶやいて親指の爪で砂利をぬぐいとり、近くの水飲み場まで持っていった。蛇口をひねると透明な水がねじくれながら溢れた。泥の染みついたぬいぐるみにかぶせて、じゃぶじゃぶとしぼるように洗う。

赤い西日に照らされながらラーメン鉢を洗っていたときのこと、ふっと目のなかによみがえっ

た。雨水を吸いまくった眼球の底が、急に白っぽくぬくもって、涙がつとつ、と嘘のようにかんとにこぼれた。どうしようもねえよな、僕は。ほんとにひどい。いつまで、このままだろうか。いつまでも、このままだろうか。唇の端がふるえた。いつか、いつか、となにか切ないものがはさまった喉で呻いていた。祈った。

二十歳前にもなって、いまさらこんなことでぐずるのは、ちょっと、恥ずかしかった。悩める思春期はもうすぎたはずだった。時代はくりかえすというわけか。つらい。いつかを信じるしかない。何回でも信じなおすしかなかった。

※

洗ったシロクマくんは、結局、ふたたび持てあましたあげくに水族館の落としものコーナーにあずけることにした。というか、はじめからこうしていればよかったのだ。なぜ思いつかなかったのか。やはり、僕には若干脳みそが足りていなかったのだと断じざるを得ない。

受付付近に設置してある、段ボールでできた簡易的な落としもの入れをのぞく。スポーツ・タオルや銀縁の眼鏡、まだ動いている腕時計やどこか見知らぬ場所に行く切符に混じって、手のひらサイズのぬいぐるみの先客がいた。よくみたら、今、僕が握りしめているペア・ストラップのシロクマ、その相方だった。

そっちも落としのかよ！と僕は心の奥で叫び、ひとしきりげらげら笑った。それから、手に

持っているほうのシロクマくんの水分を、だれかさんのタオルで念入りにふきとり、しっかりと二頭を抱きあわせた。からだの奥の磁石どうしがひつつく、よわよわしいけれど確かな感触。

もう離すんじゃねえぞ、と再会した恋びとたちに声をかける。おまえらの主人はむかえにこないかもしれないけれど。もとから磁力もよわいけれど。せめておまえらは、いつか廃棄されて灰になるまで、お互いをぜったいに離すなよ。頼むから。それだけできつと、僕は救われるから。ゆっくりと、互いを抱きしめあう二頭からとおざかりながら、僕はちいさく息を吐く。いまごろ、目尻が赤らんでいないか気になった。

こんなことが、いったいなんに結び付くのか、僕は知らない。

情けない自分、もどれない失敗、おのれのクズさを露呈した瞬間、そんななんの意味があったのかわからない時間を、なんの必要もなかったようなできごとを、なにひとつ捨てずにとっておいて、積み重ねて、財布やらポケットやらをばんばんにしていれば、いつか僕も、優しくなれるだろうか。こんな僕でも、いつか、あなたみたいな優しいひとになれるだろうか。

このさき、そんな希望があるのなら、がんばろうとおもった。もうちょっと、がんばりたい。全力で面倒くさがるけど。たまにさぼるけど。愚痴も文句も死ぬほど言うけど。すぐ、めそめそするけど。ちょっとだけ、がんばってみせるから。

雨はまだ、降り続けている。

髪から垂れる雫をぬぐいながら、シヨップではとんどふざけ半分に水玉の散らばるクラゲ柄の傘を購入し、水族館をでる。濡れて体が冷えたせいか、なにか温かいものをお腹いっばいに食べ

たくなった。カレーばんとか……。そうだ。カレーばんを食べよう。僕は帰りみち、コンビニに寄ってカレーばんを買い占める。

そして領収書をもらってやる。恥ずかしげもなく、もらってやる。

(理学部理学科一年)

柿

山田 龍太

脳の奥の奥にある見えない糸を何者かにやんわりと引っ張られた感覚がして、目が覚めた。途端に音量のままを一気に回したようにガタンガタンと電車の音が世界に溢れて、鼓膜の振動を感じる。寝起きはなぜかいつも左耳にだけ膜が張ったように音がくぐもって聞こえる。重い瞼をこすると、乾いた目やにが指にこびりついた。

あくびをしたあと大きく息を吸い込むと、金木犀の濃厚な甘い匂いが鼻腔に広がった。夕暮れの閑散とした駅に停車している電車のドアは全開で、車掌のくぐもったアナウンスが誰もいないプラットホームに響いていた。さっきまで見ていたはずの夢の感触が遠くなり、もう何も思い出せない。妙な気持ちだった。眠りに落ちる前には覚えていたなにか重要なことを、夢とともに忘れてしまったような心もとなさがあった。

霧がかかった重たい思考がだんだん覚醒して意識が輪郭を持ち始める。何度かまばたきを繰り返している、乾いたコンタクトのせいで白くぼやけていた視界がみるみるクリアになってゆき、向かいの座席のシートに腰掛けたひとりの年寄りの膝小僧に焦点が合う。光沢のある安っぽい生

地のスカートから伸びている瘦せた膝小僧は生白く、皮膚が皺々だった。

ドアが閉まりますご注意ください、と滑舌がいまいち良くないアナウンスが流れて電車の扉が閉まった。車内を見渡すと、遠くの座席にどこかの子どもが忘れていったであろうピンクの手袋がぼつんと落ちていただけで、向かいの老婆以外誰もいなかった。おれが電車に乗ったとき、乗客は何人かいた気がする。うとうととしている間に全員降りていったのだろうか。それともおれの気のせいではじめから電車には老婆しかいなかったのだろうか。そんなことを寝起きの頭でたらたらと考えて、ふとどうでもよくなつて手元のスマホに視線を落とした。ロック画面には『今からでも遅くない、内定ゲットのための……』という見出しの就活サイトからのメールと、妹から送られてきた一文のメッセージが表示されていた。

『明日部活帰りに病院に貰い物のお菓子持ってくけん今日は甘いもの食べませんとって』

妹が病院に足を運ぶなんて珍しい、と思いつながら画面をスクロールする。絵文字も顔文字もない素っ気ない文面に、りょうかい、と返事しようと思ったが、それすらも面倒くさくなつてそのまま画面を閉じた。最近、他人とオンライン上で活字のやりとりをするのがひたすら億劫になった。人から送られてきた文面をロック画面上でちらりと見て自分の心の中だけで返事をして満足してしまうから、メールやラインの通知は増えるばかりだ。『今日、ヒマ?』など明確な消費期限つきのメッセージにも返信をおろそかにしてしまっている。煩わしい。もういっそのこと、全部消去消去、そう消去したい。三桁を超える通知でがんじがらめになった体ごとアカウントからぬるりと這い出して自由にあちこち飛び回りたい。

ガタン、という音とともに電車が動き出し、体が右に傾いた。老婆の腿の上に抱えられたばんに膨らんだ半透明のスーパールのビニール袋越しに、丸いおぼろげな輪郭の鮮やかな赤がぼわっと発色していた。林檎だろうか、と思いつながらあくびをした。空っぽの胃がむかつく。昨日の夜いつもより飲み過ぎたせいだろう。そういえば朝から妙に脇腹も痛む。昨日は大学からアパートに帰ったあとひとりで夕方からコンビニで買った安いウイスキーをストレートで飲み続けた。最近、お酒に溺れて記憶を飛ばし、タイムワープしないと長い夜を乗り越えられない。酒自体を嗜むためではなく、酔うためだけに飲んでいる時点で自分でもさすがに末期だと思ふ。もし実家のおふくろがこのありさまを見たらきつと泣くだろう。飲むというより、もはや摂取。昨晚も一回目の嘔吐までは覚えているが、そのあとの記憶は綺麗にすっぽり抜け落ちており、気がつくとなれた床の上で朝を迎えていた。おれは全裸になっていて、脱いだ洋服とパンツはなぜか食器棚に放り込まれていた。

このごろなぜか慢性的に疲れている。どうしようもないぐらい疲れが全身を蝕んでいる。酒のせいではない。道端に咲く綺麗な花を見ても何も感じなくなつた。感受性が廃れてきている。感動モノの映画や本を読んでもちっとも響かない。この間息をするように「しんどい」と言ったら、隣にいた研究室の友人に「なんで？」と言われてはっとした。自分でもわからないのだ。何が辛いのかわからないが、たしかに辛い。原因がわからないから取り除くこともできない。思い当たる事象がいくつかあることはあるのだが、そのどれをこの疲労感と重ねてみてもどうもしっくりこない。もっとほかにあるだろう、と思ってしまう。ひょっとしたら、幾多ものちよっとした不

安と不安がすべて混ざって大きなうねりのように姿を変えて、巨大な漠然とした疲れを生み出していると考えるのが賢明なのかもしれない。だとしたら絡まり合った不安の要素をひとつひとつピンセットで慎重に取り出して潰していけばこの気怠さとおさらばできるのだろうか。そんなの無理だ。自分の力だけで解決できる問題は多くないし、果てしなく複雑な不安のシラミつぶしの可能性なんて絶望的だ。

スマホの画面を見ると、また新しく就活サイトからのメールが来ていた。うんざりして画面を閉じる。

人生を考える軸が、自分以外の何かに変わるとき。それはまさに今。いや、もうすでに遅いくらいだ。それなのにおれは危険すぎる万感にいつまでも身を委ねて、何の変哲もない一日一日を潰しながら生きている。おれが周りと合わせて呼吸できないのは、人生に期待しすぎているせいだろうか。

ついこないだまで一緒に「自分たちだけの今」という瞬間を楽しいこと埋めるのに精一杯だった同期の友人たちは、実に器用に人生のピントを自分中心の世界から企業や社会へと切り替えて、今ではびかびかの内定をつまみに楽しく酒を飲んでいる。頭の中にある大学生のテンプレートのようなものをなぞるように、授業をさぼってサークルに明け暮れたり、乾杯のシーンをSNSにあげたり、徹夜で海までドライブしたり、女の子を誘って花火を見たり、充実した大学生を演じる時代は気付いたらいつのまにか終わっていた。責任を背負うことなく自由なふりをして遊べる束の間の人生のバケーション。四年間あっという間に時間が過ぎるとは聞いていたが予想以上だっ

た。

学生から人材へ。

ああ、いやだ。おれはただ、おれだけの幸せを追求していつまでも自由に人生の選択を重ねていきたい。なんてほざいたら速攻、もっと大人になりなさいと立派な大人たちは憤慨するだろうが、大人になれって一体なんだ。完全に完璧で完結した人生なんかあるもんか。足掻きながら失敗、失敗を重ねた失敗の塊が人生だ。他人にも自分にも完璧を求めすぎる人間にはなりたくない。

大学生のうちに思う存分遊んでおけ、と今年社会人になったひとつ年上の先輩たちは皆口を揃えて言う。バイト先の社員も、はじめて会った美容師も、ベンチでたまたま隣に座った背広も、おれが大学生だと知ったとたん心底羨ましそうに遠い目をして「一番楽しかったなあ」と言う。大学生活を経た大人たちは面白いほど皆が同じことを言う。社会人になったら無茶したくてもできないからな、と人生を悟ったようなしたり顔の彼らの乾いた笑顔をカシャッと写真に撮って引き伸ばし、『前世はウニ、来世は孵化できない魚の卵』なんてめっちゃくちな題名をつけて自宅の壁に飾って毎晩ウイスキーをちびちび飲みながら眺めたい。いや嘘だ。そんなもの死んでも飾りたくない。やれサークルだの、やれ飲み会だの、やれ海外旅行だの、やれ恋愛だの、友だちいっぱいスケジュールいっぱい、ほらごらん、こんなに充実した大学生活を送れましたのでもう未練はないです、とでも言いたげに涼しい顔をして社会に溶け込みうまく順応していく卒業生たち。人生のコントロールがうまく過ぎて信じられない。所詮みんな人生なんて初心者のかせになんだか肝が据わりすぎている。それとも不安だからこそ足並みを揃えようとするのだろうか。せっかく

人間に生まれてきたのだから、人工的に作られた社会の枠組みを超えて、人間としての欲びを余すところなく楽しみながらおれはのびのびと動物的に生きたい。好きな歌を歌い、太陽を感じ、思ひ悩みつつも月の満ち欠けを気にしながら一度きりの人生を謳歌したい。人間だって四捨五入したら猿だ。だからこそあくまで野性的な、根拠のない直観を何よりも大事にしたい。頭がいいふりをして難しい顔をしながら生きるより、口をぼかんと開けてアホ丸出しのふざけた面して生きていたい。社会の歯車と化して真面目に生きている人々の間をうまい具合にひょいひょいとすり抜けて、あいつはだめな人間だと軽蔑されながらもしたたかに生き永らえてみせる。

向かいの車窓を見やると、いくつもの家々の屋根がもの凄く速さで溶けるように視界に現れては消え、現れては消えた。赤い林檎の入ったビニール袋を抱えた老婆の表情は、逆光のせいによく見えない。線路がゆるやかにカーブし、床を照らしていた西日がおれの眼球を直撃した。西日は熱を帯びていて、だんだんと暑さを感じたおれはパーカーを脱いだ。ここ最近毎日のように外出時に羽織っているこのパーカーは二ヶ月ぐらい一度も洗濯していないせいで、ところどころ得体の知れないシミや汚れがついている。着回すためにもう一枚ぐらい羽織がほしいが金がないのだ。転々としていたアルバイトを最後に辞めてからもう半年が経つ。今までのアルバイトで稼いだだけなしの貯金は、一人暮らしの生活費と酒代でみるみる減り、昨日の夕方口座から千円札を引き落とそうとしたらとうとう何も出てこなかった。金がないと身をもって痛感するのは想像していたより惨めなことだった。精神的に余裕と自信を失った。それなのにおれは片道百五十円も払って、今日も電車に乗っている。会いたくもない人に会い、吸いたくもない空気を吸うために

今日も金と時間を削っている。誰かに頼まれて嫌々行っているわけではない。特に行くべき理由や責任もない。原動力となっていてるのは説明のしようがない焦りに似た感情。国語のテストだったらバツをつけられるであろう心情と行動の不一致だ。人間の核は矛盾でできている、とどこかで誰かが言っていたような気がする。墨汁をいっぱい含んだ筆で荒々しく殴り書きした「人間とは矛盾の化身なり！」という横断幕のイメージが頭の中でパッと広がる。だとしたら人間を人間たらしめる矛盾とはなかなか愛おしいものだ。おれも自分の中でびよびよとごめく矛盾を密やかに愛すべきなのだろうが、今はそんな余裕がないからおれはおれがよくわからなくなって苛々と乱暴にパーカーを畳むことしかできない。きつと臭いだろうと思っただけのパーカーに顔押し当てて匂いを嗅いでみる。ぬるくなった布地は自分の家の玄関の匂いがした。

そのとき「あ、」と短い声が出た。見ると老婆の抱えたビニール袋からさきほどの鮮やかな赤色の塊がちょうど滑り出た。赤々と燃える球体は老婆の足と足の間の溝を転がって、生まれ落ちるみたいに膝小僧の間からボトンと床に転がった。おれが林檎だと思っていたものの正体は熟れすぎた柿だった。老婆が曲がった腰をさらに深くかがめて手を伸ばし、柿を拾おうとしている。自覚ある親切心が沸いたわけではなく空っぽの感情のままおれはほとんど反射的に立ちあがり、老婆の足元に近づくと柿に手を伸ばした。白く乾いたいくつもの靴跡で汚れた床に投げ出された柿を持ち上げてみると思ったよりもずしりと重く、芯まで詰まった冷たさに指が痺れた。

刹那、体験したことのないイメージがあたかも古い記憶のように走馬灯となって脳裏に映し出された。よみがえるのは少し黴臭い布団。目が覚めて、あくびとともに伸びをしたら足の裏にこ

つんと何か冷たくて硬い物が当たり、反射的に膝を引っ込めながら薄汚れた布団をおさるおそるめくると突如真っ赤な柿が出現した。白いシートと場違いな柿の赤さのコントラストに目を見張りながら布団からゆっくり起き上がると、つるりとした柿の表面を覆っていた俺の影もゆっくり動いて窓から差し込んだ白い光が反射した。裸足の指先でちゃんと柿をつついてみる。食べ物で蹴ってはいけません、と妙に大人びた声で柿が言う。口がないくせに物を言うなんて生意気だ、とおれは今度は強めに柿を蹴飛ばす。すると柿は赤ちゃんのような幼い悲鳴をあげながら布団から転がり落ちて冷たいフローリングにごろごろ曲線を描きながら部屋の隅の壁にぶつかって死んだ。柿があった布団の箇所には拳を押し当てたような皺がついている。顔を近づけて匂いを嗅いでみると、実家でよく使っていた柔軟剤の匂いが。

「ああ……どうもありがとねえ」

声がして、我に返る。見上げると逆光のなかで老婆の顔が黒いシルエットとなって目の前にあったのでぎょっとして思わず身を引いた。

そがんびっくりせんでも。そういつて黒い顔の老婆は悪趣味な笑顔をみせた。さっきまでの幻想の余韻がまだ残っており頭がふわふわした。記憶の底に埋もれた夢の断片が急に浮かび上がるようにおれはしょっちゅう脳のコントロールを失う。爆発的に起こる脳の妄想バグ。目を開けた状態で夢を見ているような感覚に陥る。真面目なことを考えながら草むしりしているときや、人の多い横断歩道を渡っているとき、本屋をぶらついているとき、不意に頭の中の思考のダムがぼんと決壊し、ありとあらゆる記憶や言葉や感情がごちゃ混ぜになってゲリラ豪雨のように押し寄

せ、世界がぐるぐると回り出す。舌が痺れ、頭が痛くなる。シナプスが痙攣でも起こしているのか。意識の隅では草むしりのことや目の前にあることを冷静に考え続けている自分がいるのに、脳のメインステージは何者かに乗っ取られてしまっただく制御が効かなくなる。でもそんなとき、おれは大抵いつも通り真面目な顔をしている。つんと澄ました顔をして頭の中のカオス状態が過ぎ去るのを耐える。だから周りの人間に脳内のバグを気づかれることはない。頭の中と言動が切り離されてばらばらになったような奇妙な感覚。内面と外見のコントラストの不自然さに自分でもぞっとする。

しゃがみこんだまま放心していた俺が老婆に拾った柿を手渡そうとすると、彼女はすっと手のひらを俺の顔に向けてそれを制した。音のない、意外とすばやい動きだった。拾ってくれたんだけん、ね、それはお兄ちゃんにあげる。そう言って老婆が皺くちゃにすぼまった口元をにいと広げ、黄色い歯を見せた。逆光のなかでぎょろついた眼球と歯茎が光を反射する。えっいいんですかありがとうございます、という自分の声を遠くに聞きながら老婆のグロテスクな歯茎とぬめぬめした黄色い歯に鳥肌が立った。おれは柿を持っていない右手でそわそわとつり革に掴まった。背後の座席に置きっぱなしの荷物の存在が意識の片隅で浮遊している。

今日は学校帰り？と黄色い歯が尋ねた。はい、そうです。素直に俺は答えた。西日に照らされた頭頂部から地肌が透けて見えている。骨ばった老婆の人差し指がいたずらっぽく自分の隣の座席を指差していたが、俺は愛想笑いを貼り付けて断った。筋肉の運動だけで作る笑顔は、三ヶ月半続けた居酒屋のアルバイトで苦行の末に身につけた。

このあとはどこさん行くとおうち？という質問に、「違います」と答えようとして口を開けた瞬間、不意に視線を感じた。電車のいたるところから、いくつもの粘っこい視線を感じた。周りを見渡すが、もちろん誰もいない。その視線の正体がわからぬまま、俺は「違います、病院です」とさきほど言いかけた言葉の続きを紡いだ。病院？と老婆はなぜか鼻の下を伸ばして妙な表情を作った。

「父が入院してるんです」

視線が濃く、熱くなるのがわかった。思わず背筋が伸びる。父が入院していると聞いた途端、老婆はあらあと手で口元を隠し、同情してみせた。どうせならそのままずっと隠してほしい。ほんなら若いのに大変ね、さっきの柿はお父さんにあげたい、それにしてもええあんたは親孝行ね。老婆は皺だらけの口元を激しく伸び縮みさせながらひとりで話し続けた。はい、そうですね、はい、はい、とおれは機械的に相槌を打ちながらも初対面の老婆の馴れ馴れしい会話のペースに飲み込まれるのが嫌で、心の中で思いつくまま「ガラムマサラガラムマサラ」とインド料理に使われるスパイスの名前を呪文のように唱えていた。その間も背中を焼く視線はますます熱くなり鉛のように重みを持ちはじめた。おれには望ましい老婆との会話の終着点がなくなく見えていた。期待される枠組みがはっきりと見えてくるたび例の視線は重みを増した。口だけは愛想よくイエスイエスと肯定的な相槌を打ちながら内心ガラムマサラの呪文を唱え続けている自分の身体と心にいよいよ乖離を感じはじめたとき、鉛の視線の主である無数の目玉が飛び出してぐるぐると互いに絡まり合いながら背後から迫ってくるような錯覚を覚えた。首筋からちりりと電流

のように全身に恐怖が走り思わず顔が引き曇る。見えない足枷と手枷をはめられたような気がした。目玉の視力では到底見えないどこか遠くへ行きたい。

そのとき、耳障りなブレイキ音とともに「まもなく、ハラミヤ駅、ハラミヤ駅」と鼻にかかった声のアナウンスが流れ出した。降りなければならぬ。おれは老婆に会釈をすると自分の席に戻った。最後まで老婆の顔は逆光でどこかぼやけた印象のままだった。置きっぱなしにしていたパソコンの入った重いリュックを背負い、ドアの方へ向かいながらも一度老婆を見る。老婆は美味しい料理でも見るかのような目つきでおれを見ていた。落ち窪んだ眼球の異様な輝きがおれをひどく不快にさせた。

プシュー、と鼻から出すため息のような音とともにドアが開いた。少し黴臭い車内に、からりと冷えた秋風が吹き込む。老婆の飛ばした唾液や言葉もぜんぶ風ではらばらと崩れて飛ばされたような解放感があつておれは大きく深呼吸をした。

電車を降りると、線路を挟んだ目の前に父のいる病院がそびえたっていた。ホームを出て、線路を渡る。夕日が街のいたるところを蜜色に染めていた。甘い金木犀の香りのする風が頬を撫でる。

おれは左手に柿を持ったまま、病院の壁に沿ってぐるりと周り、正面玄関へと向かった。ぴかぴかに磨き上げられた病院の自動ドアを抜けて中に入ると、こもったアルコール消毒の臭いがした。つんと鼻に刺激が走るほどの強烈さはない、もっと遠くにある臭い。押入れの奥にしまい忘れていたような少し古びたアルコールの臭いがした。

手元の書類から顔を上げてこっちを向いた悪趣味な赤いメガネをかけた受付のおばさんに会釈をする。彼女はおれの顔を確認すると、つまらなそうに再び書類に視線を戻した。しょっちゅう通っているうちに顔を覚えられ、あるときから顔パスが利くようになった。受付手続きをしなくて済むのは楽でいいのだが、陰湿な雰囲気はこの病院と他人行儀以上の深い繋がりを持ってしまったような気がしてなんとなく嫌だった。

病院のロビーは閑散としていて、腰の曲がった老爺がひとりと、八歳ぐらいの図体をした子供を膝の上に抱いた母親が座っているだけだった。膝に抱くには大きくなりすぎた子供の身体がソファからはみ出していた。

退屈そうにロビーに設置されたテレビの画面を眺める彼らの横を通り過ぎ、隅に設置してあった自動販売機でコーヒを買った。この自動販売機の飲み物はペットボトルではなく紙コップで出てくるのだが、ボタンを押しても蓋が毎回ついてこない。蓋のついていないホットコーヒはちょっとした衝撃でこぼれてしまいそうで手に持つとひどく不安になる。殺菌消毒されたような無機質な廊下を、熱々のコーヒを片手に落ち着かない気持ちのまま歩いていくと、突き当たりにはまたもや清潔な、しかしどこか暗い階段が現れた。エレベーターは知らない人と乗り合わせたときの沈黙が嫌いだから極力使わない。呼吸をするのもはばかられるようなあの張り詰めた静寂。不自然すぎて耐えられない。それならばコーヒを片手にげいげいと息をきらしながらもこうやって自分の足で階段を上るほうがずっといい、と心の中で独り言を言っているうちに五階に辿り着いた。目の前にはクリーム色の長い廊下が奥まで伸びている。窓から差し込んだ西日が、

壁に沿って等間隔に設置された個室のドアを赤く染めている。誰もいない廊下におれのスニーカーの足音だけが響いた。廊下にはいくつもの夕日のかたまりが長方形に伸びていた。五〇一号室、五〇二号室を通り過ぎ、五〇三号室のドアの前に辿り着いて足を止めた。壁にはめ込まれたネームプレートには、名前ではなく「1009467」と素っ気ない番号が記されている。個人情報保護のためにいつだったかある時期から名前ではなく患者に割り振られた番号を記すようになったのだ。おれは五〇三号室のドアの前でそわそわ見渡して汚れやシミを探した。だがいくら目をぎよろつかせてみても病院の廊下は隅々まで完膚なきまでに磨き上げられており、汚れなどひとつも見当たらなかった。いくら病院とはいえ、これほどよそよそしく潔癖な廊下は見ることがない。なんだか気味が悪い。一体誰が掃除しているのか。ひょっとしたら今もちょうどあの突き当りの廊下の曲がり角の陰あたりから、掃除用具一式を詰め込んだ重たいバケツを抱えた掃除屋が息をひそめて汚れた鼠を見るような目つきでおれを見張っているのではなからうか。あるいはナメクジの足跡を消すかのように、おれが歩いてきた道筋を辿って猟奇的なスピードで雑巾掛けをしている掃除屋が今にも背後の角を曲がって襲ってくるかもしれない。掃除屋、という文字を頭の中で堅苦しい明朝体で想像したら、なぜか受付の悪趣味メガネおぼさんの顔がぼんと浮かんできた。次にふざけたゴシック体で思い描こうとしたら、誰の顔も浮かばなかった。

すぐにつまらない妄想をしたがる脳に大きく息を吸い込んで酸素を送る。病院の空気はアルコール臭くておれの身体まで殺菌消毒されたような嫌な感じがした。手のひらをシャツの裾に強く擦り付けて、脂汗を拭く。どうせ鍵などかかっていないと知っているのに、おれはドアを強めに二

回ノックした。いつも通り中から返事はない。一拍置いてからおれは引き戸の取っ手をそっと掴んだ。ドアは音もなくすると滑らかに開いた。

病室に一步足を踏み入れると、さっきまでとはまた違う独特の臭いがした。加齢臭と腐敗臭とやっばりアルコール消毒液の臭い。この臭いだけは何度嗅いでも慣れる気がしない。

「父さん、来たよ」

感情のない声はどこにもぶつかることなく白い病室の壁に吸い込まれた。部屋の隅に置かれたベッドで父はこちらに背を向けて丸くなっている。おれが近づいても動かなかった。

父が目を覚ましていることは知っていたが、おれは足音を立てないように忍び足でベッドの近くまで行き、閉め切られていた埃っぽいカーテンと窓を大きく開けると金木犀の香りとともに勢いよく風が部屋に入ってきてカーテンを揺らした。東の空はもう薄暗く、空の高いところに夜の気配が広がっている。その透き通った水彩のような紺色と、ぼつぼつと明かりが灯りはじめたミニチュアサイズの建物の街並みを覆う赤々とした夕焼けの名残が繊細なグラデーションを成している。その夕暮れと夜のちょうど境界に、赤い満月が浮かんでいるのを無感情に眺めた。最近のおれは疲れすぎて星や月の輝きにすらも心が震えなくなってしまっている。そのことがたまたまなく哀しかった。

うう、と呻き声とともに布団がぶるぶる震えだし、毛布から瘦せた腕がゅっと伸びた。その手が指差したベッド脇の華奢な丸テーブルには、病院の売店で買った弁当と割り箸が一膳置かれている。いつも通りおれは無言のまま手に持っていたコーヒーを弁当の横に置き、父が横たわる

ベッドの下に収納されているパイプ椅子を引っ張り出して腰掛けた。錆びた足の部分がキシキシと危うい音をたてる。弁当の輪ゴムを外し、透明な蓋を開けると雫が垂れて白いご飯に数滴落ちた。

いただきますも言わず、枕に半分埋もれた薄くなった父の後頭部を眺めながら黙々と弁当を食い始める。今日は煮魚と野菜の和え物が入った病院にありがちな健康志向なメニューだ。コーヒートは合わない。前回来たときはめずらしくケチャップたっぷりなオムライス弁当だった。こうやって父は予告なしに訪れるおれに必ず病院の売店の弁当を振る舞う。寝たきりの父はおそらく看護師あたりにおつかいを頼んでいるのだろう。誰も見舞いに来なかった日の夜、丸テーブルの上に用意されていた弁当が蓋も開けられぬまま捨てられているさまを想像したら胸が少しだけ苦しくなって、自分の人間らしい健康的な感情にほっとし、同時に、平凡な反応しかできない自分をつまらなくも思った。

死に蝕まれつつある父を拝みながら弁当を食う気まずさと背徳感を感じながら、鯖の骨をにょろりと口から出す。塩分控えめな味付けのおかずは冷えていますますます味がしない。静かな病室でもぎゅもぎゅと自分のまぬけな咀嚼音だけが響いていた。気まずさに押し潰されそうになりながらも、おれは機械的に鯖と白飯をバランス良く交互に口に運んだ。

おれはいいなにがしたいんだろう。

半分ほど食い終わったあたりで米粒のついた弁当の底を見ながら毎回同じことを思う。そしていつも神妙な気持ちのまま家に帰り、よくわからないまま酒を飲み、次の日にはすべて忘れてケ

ロリとした顔でまた病院に足を運ぶ。たぶんおれはバカなのだ。物事を深刻に考える能力が欠如しているのだ。なんて、雑な片付け方をしたい気持ちになるが、これも例の矛盾ってやつだろうか。よくわからない。それにしても矛盾とは便利な言葉だ。すべてを包括しうる無責任さがある。あの格言を思いついた人も実は考えることを放棄したバカなのではなからうか。

「父さん、美香がお菓子持って来るってさ、あした」

鯖を飲み込みながら妹から送られてきたさっきのメッセージの旨を父の後頭部に向かって伝えた。臆病なおれは余計なことをあれこれ考えてしまうと父と会話すらできないから、言葉が脳内で整理して文として成り立つより先に口を動かすようにしている。掛け布団の上に置かれた父の腕がぴくりと動いた。さっきからカーテンが風に揺れていて、ハリボテのようなまんまるな月が見え隠れしていた。

「くるのか……みかが、くるのか」

喉に穴が開いているのではないかと思うようなかすれた弱々しい声で父が言った。おれは「そしてみたいだよ」と答えた。そうみたいだよ。気取った役者のような喋り方。我ながら鼻につく。父はそれを聞いてああ、とか、うう、と感嘆とも相槌ともつかないような声を出した。布団の盛り上がりがるぶると小刻みに震えだす。寝返りを打ちたいのだと思った。おれはそれには気づかないふりをして目を逸らした。

「……かあさんは……くるのか」

布団がこすれ合うかしゃかしゃという音の隙間に、たしかに父の声を聞いた。風に煽られたカー

テンが大きく身を振る。かあさん、という言葉は「か」にだけアクセントが効いて正確には「くあっちゃん……」と聞こえた。泣きじゃくったあとの子供のひきつった話し方のような、あるいはパウーが足りないくしゃみのような、独特すぎる「かあさん」だった。突如おふくろの話が出てきて不意打ちをくらったおれは、鯖の骨が喉にひっかかったふりをして咳き込んだ。おふくろが見舞いにくるわけないじゃねえか。吐き捨てたい気持ちと、何かの奇跡が起こっておふくろが手土産を片手に父の病室を訪れたりしてくんないかな、なんて相反する考えが同時にふわっと浮かんで消えた。

おれは爪を手のひらににくいこませながら「かあさんは来ない」と言った。一拍置いてから「いや来るわけがないやろ」と続けた。布団の震えが止まった。じゅわっと変な汗が出て、身体が芯がきゅっと痺れる。静寂の奥にかすかに風の音だけが聞こえた。父は何も答えなかった。

おれは父親のことを痛々しく思いながらも、かすかに、父を痛めつけてやりたいという暴力的な欲望がそもそも虫のように体の隅っこを這っているのを感じた。父がいつも用意してくれている冷えた弁当に感謝しているし、弱った父の枕元で無神経にむしゃむしゃ鯖を食っている罪悪感もしっかり感じるが、頭の隅の方では「酒とチーカマが食いてえ」なんて全然関係のない不謹慎なことを平気で考えているのも否めない。いままさにこのシーンを映画かドラマにするなら、間違いないふさわしいのは半音がふんだんに使われた物悲しい音楽であるはずだが、今おれの頭のなかではちゃらちゃらしたバンドの『rich sex』という場違いにアップテンポな曲のサビの部分がエンドレスで流れている。

残酷だ、人間の脳は。きっとあまりに複雑すぎるんだらう。まったく複雑すぎて疲れる。自分のことがたまに得体の知れない珍獣のように思えてくる。自分のことさえわからないのに他人のことなどわかるものか。わかりたいと願っておそろのおそろの歩み寄るさまは可愛いが、したり顔でわかったようなふりを他人からされると癢に触る。自分に自信がないくせに、妙に高すぎるプライドのせいであまく動けない。この歪みはなんなんだ。

小さく上下する布団のふくらみを急に見ていられなくなって、おれは窓の外に視線を移した。外はすっかり暗くなって、月が高い位置で煌々と輝いている。

いまだでは人の手を借りなければろくに寝返りも打てないほど小さくなっている父は、つい数年前までこんな姿など想像もできないほど頑固で勝手な男で、何事も常に主導権を握りたがる性格だった。自分の意に沿わないことがあると、暴力こそ振るわなかったものの声が枯れるまでおれたちを罵倒した。物心ついた頃から理不尽な叱らればかりされていた。鬼。父のことを妹と陰でそう呼んでいた。だがそんな父のこともおふくろはどんなときもおれたちの前で悪く言ったことはなかった。たとえ目の前で子どもが目茶苦茶な理由で怒鳴られていても止めることはせず、口を真一文字に結んだまま意志を持っていつも部屋の間から静かに見守っていた。おふくろは悪い人なのか、それとも弱い人なのか。布団の中で何度も泣きながら考えたことがある。おふくろは毎日うまい飯を作ってくれたし、授業参観の日には必ず妹とおれの教室をせわしなく往復していた。愛されていることを日常で感じる分、おふくろのことがよくわからなかった。

そんなおふくろは父が五十になったとき突然おれと妹を連れて家を出た。別れを決断した後の

おふくろの行動は速かった。あつという間に荷物をまとめて、書類やその他諸々の雑多な手続きをびゃつと済ませると、颯爽と父を捨てて縁を切った。おれはおふくろの得体の知れない意志に見開かれた瞳が怖かった。そのときおれは九歳で、妹は五歳だった。

定年まで仕事をしていた父が、その仕事をやめたとたん電池が切れたように身体を壊して入院したことを親戚から知らされたとき、おふくろは台所でパスタを茹でながら表情ひとつ変えず「そう」とだけ言った。感情のない声だけが記憶にこびりついており、あのときのパスタの味はすっかり忘れてしまった。

小学校四年生までしか共に過ごしていない父との幼い頃の記憶は色褪せており、父に対する憎しみはそれほど深くはない。だが決して好きにはなれないと確信している。幼いおれたちに理不尽に怖い思いをさせた父のことを未だに許すことはできない。しかしだからといって目の前の弱りきったひとりの老爺に慈悲に似た感情を抱いていないと言えば嘘になる。震える父の指先に愛おしさすらも覚える。だが、台所に枯れた花が生けてある強靱そうな花瓶であの禿げた後頭部を殴りたいとも思う。同時に、布団ごと父を抱きしめたい衝動にも駆られる。

ああもう疲れた。規則性のない感情の起伏にもう疲れた。来世おれは海の底で揺れる海藻になりたい。芽生えて、ゆたゆたと波に揉まれながら成長して、魚たちに身を突かれ生をわけあたえてやがて枯れて死ぬ。脳みそや眼球なんて余計な付属品はなく、ただ全身で太陽を感じながら光合成をして波に揺られていたい。生きている間じゅう、ずっと。

開け放った窓から、子供の笑い声が風に乗って聞こえてきた。ベッドに横たわる父の細い首筋

から突き出た尖った喉仏が上下に動いているのがときどき見える。喉仏という男らしいパーツがこんなに痛々しく見えたのは初めてだった。

おれは目を瞑った。父に聞こえないよう慎重にため息をつく。自分でここまで来たくせに、ふと世界から父を閉め出したくなって、ポケットの中でぐちゃぐちゃに絡まっていたイヤフォンを解きもせずに両耳につっこんだ。音楽は流さなかった。ただ、外界の音をシャットアウトして自分だけの内的な世界に身を委ねたかった。風の音も子どもたちの声もなにも聞こえなくなった真っ暗闇のなかで、おれは三つ深呼吸をした。目を閉じると、身体の奥深いところでいろんな感情がシコリのように凝結し、じゅんじゅんと痺れているのを感じた。

おれは自分の魂がするりと身体を抜け出し、垂直に飛び上がる様を想像した。いや、想像した、なんて意識的なことではなく、勝手にイメージが自然と脳内で弾けた。そのままおれは病室の天井を頭で突き破り、六階、七階の天井まで突き破ると、すっと周りの空気が冷たくなり、見ると空にぽかんと浮かんでいた。下界には病院の屋上が広がっている。おれはさらに上へ昇った。進むたびきんと冷えた空気が針のように肌を刺した。寒さで肺が痛みはじめる。と、そのときふわっと何者かに抱かれたように急に身体が暖かくなって、見ると、相当高く昇りつめたのだらう、沈んだはずの夕日が赤々とおれを照らしていた。太陽ってこんなにもあたたかいんだ、とおれの脳の中に存在するおれは感動して思った。思考のマトリューシカ状態。ふと客観的になったとたん、おれは地上に引き戻され重たい身体の中に収まっていた。薄いまぶたを閉じたままおれは、ここは繭の中、と唱えた。これはおれの体がほどけて糸と化し、できあがったおれだけの繭――。

龍太。

父に名前を呼ばれて我に返った。

今日をはじめ父がおれの名前を呼んだ。父の声は、なぜか輪郭を持っていなかった。目を開けると、さっきまで天井を向いていた父の顔がこちちを見ていた。思わず、背筋が伸びる。何か重要なことを言われるのではないかと身構えたが、父はいつまで経っても二の句を継ごうとせず、ぼかんと口を開けたままおれを見ていた。父の震える指先は不規則なりズムで掛布団をタップしている。とん、とんと、とんとん。とっ、とっ。

龍太。父の声が頭の中で反芻している。掠れた声で名前を呼ばれて、あぁやっぱりおれはこの人の子どもなんだなあ、なんて今更ぼんやりと思った。感動を伴わない、しみじみとした実感だった。

干からびたするめのように小さく皺々になった父を見ていると、言いようのない不安に襲われた。思わず立ち上がろうとしたらパークカーのポケットからさきほどの柿がごろんと落ちてベッドの下に転がった。慌ててかがんでベッドの下を覗き込むと、ぎょっとするほど埃が溜まっていた。おそるおそる手を伸ばし、できるだけ汚れないように転がった柿を手繰り寄せて拾い上げる。見ると柿の表面は塵でざらついており、さらにはいつの間にか皮の一部がえぐれたように剥けて、なまなましい果肉が少しだけ顔を出していた。

しゃがみこんだまま、皮からはみ出た果肉を見つめていると気持ちさがざわつき、立ち上がろうとしたら肘が丸テーブルにぶつかった。冷めたコーヒーに波紋が広がる。ベッドを見やると、上

半身だけ仰向けになった父が顎を引いてこっちを見ていた。おれは「これ、お土産」と言っ柿を高く掲げて見せた。痰が絡んで掠れた声が出た。父は柿を見ても何も言わなかった。おれは柿を掲げていた右手をぎこちなくおろすと、のりの効いた真っ白なシーツの父の足のふくらみの上に柿を置いた。その瞬間、鮮やかな色のコントラストに強い既視感を覚え脳が痺れた。妄想の中の記憶が目の中の現実と錯乱し、輪郭を失う。一瞬、起きながらにして夢を見ているような心地になった。

頭の中で起きた衝撃とびっくりするほど釣り合っていない肉体は、冷静にベッドの前に立ち尽くしていた。父は相変わらず顎を引いて虚ろな目でおれを見ている。

「柿、柿だよ」

おれは外国人に言葉を教えるかのように柿を指さしながら口を大きく開けて喋った。父は何も言わない。ただおれをじっと見つめている。

「か、き」

しつこく同じ言葉を繰り返していたら、ようやく父がゆっくり首を縦に動かした。おれはなんだかバカにされたような、救われたような、複雑な思いがして、うんうんとただ頷き返すことしかできなかった。

(文学部総合人間学科三年)

トモちゃん和猫

苛屋

放課後のチャイムと共に、時代遅れの真っ赤なランドセルを背負ったトモちゃんが、私の席へと駆け寄ってきました。いっしょに帰ろう、と小さな歯を覗かせながら、私の手を引っぱりあげます。トモちゃんと私の家はお隣同士で、登下校のとき私たちはいつもいっしょでした。

帰り道。強い太陽の光が私たちを照りつけます。暑い暑いと騒いで、こめかみに汗を垂らしながら角を曲がると、一匹の猫の姿が見えました。キジトラ模様の猫です。ブロック塀が作った日陰の中にすっぽりと収まり、前脚をたたんで堂々とくつろいでいます。私たち二人は、思わず足を止めました。

「やあ、とキジトラ猫が一声上げます。それを聞きつけたトモちゃんは、やや興奮気味に鼻を鳴らしました。

「ルイちゃんッ。この猫、今しゃべったねッ」

なんて素早いのでしょうか。私が気づいたときには既に、トモちゃんは背負っていたランドセルに手を突っ込んで、何やら取り出そうとしていました。

タブレット一つが教科書にもノートにもなるこのご時世、私たち小学生はタブレット専用のリュックを背負って学校に来るのが普通でした。それなのに、トモちゃんだけは真っ赤なランドセルを、わざわざタブレットの入る大きさに改造して学校に背負って来ていました。何でも、リュックにはないつるりとした質感と、全面に塗られた鮮やかな赤をすっかり気に入ったらしいのです。

太陽の光を跳ね返す、つややかな赤の中に突っ込まれたトモちゃんの小さな手が、真っ白な何かを引っ掴んで無事に戻ってきました。どうやら機械のようです。

みゃんみゃん、みゃおみゃお、と雑な猫の鳴きまねと共に取り出されたそれは、誰もが憧れる、最新のおもちゃでした。たしか、発売は一週間後だとコマーシャルは言っていたはず。

びっくり仰天、私があんぐり口を開けている間に、トモちゃんは本体のスイッチを入れ、おもちゃに付属していた通信機を猫の背中に取りつけました。

キジトラ猫は逃げ出しませんでした。嫌がるそぶりすら見せません。ただ静かに尻尾を揺らすばかりです。

「トモちゃん、これ、ずっと学校で持ってたの？ ていうか、なんで持ってるの？ まだ売ってないよね？」

疑問が湧き出て止まらない私には目もくれずに、トモちゃんはマイク部分に向かって喋りだし
ました。

「みゃんみゃん、こんにちは」

トモちゃんの声を拾い、猫の背中に取り付けられた通信機のランプが緑色に点滅し始めました。

ひとしきり点滅してしまうと今度は、キジトラ猫が返事をするように、もう一度鳴き声を上げました。その途端、トモちゃんが手にしていた本体のランプもまた、同じように緑色に点滅し始めました。

翻訳中、なのです。

『わたしの名前を呼びましたか？』

キャアッ、猫しゃべったよッ、とトモちゃんは歓声を上げながらびよんびよん跳びはねました。けれども本当は、機械に取り付けられたスピーカーから声が流れているだけなのです。すごいすごい、と騒ぎながらくるくる踊るトモちゃんに、すごいねえ、と私も感心したと言わんばかりに声をかけてみました。しかしトモちゃんは相槌も打たずに、キジトラ猫との会話を続けました。

「いいえ、違うよ。みゃんみゃんは、猫の鳴きまねです」
にいいい。

『あなたの鳴きまねは下手です』

ひどいッ、とがなって、トモちゃんは地団駄を踏みました。けれどもキジトラ猫は一向に構う様子はなく、たたんでいた脚をのぼして立ち上がりました。そしてさらにもう一鳴き。

みいん。

『ごめんなさい。そろそろ家に戻らなければいけません』

それを聞いたトモちゃんは慌ててキジトラ猫から通信機を取り外しました。通信機を持ったまま、どこにあるのかわからない家なんかに行かれては困ることは、朗らかトモちゃんでもすぐに

わかったようです。

キジトラ猫は取り外された通信機をちらりと顧みると、軽々と塀に上り、しなやかな足どりで去って行きました。

「すごいねえ、トモちゃん。やっぱり、動物の言葉がわかるなんて面白いねえ」

ンフフン、とトモちゃんはおかしな笑い声を上げました。

「家に帰ってから、うちの猫にも使うの」

そうです。トモちゃんは猫を飼っているのです。トモちゃんの家遊びに行くと、いつもいます。黒のブチ模様がついた、でっふりと太った猫です。小さなブチ模様が鼻の真下についていて、何ともマヌケでかわいらしい顔をしています。トモちゃんのことを大好きらしく、目にするときはいつもトモちゃんの膝の上でくつろいでいます。

トモちゃんがおもちゃをランドセルに押し込んだあと、しばらく私たちはおもちゃの話をしなから歩いていきました。トモちゃんは得意げに鼻を鳴らしながら、あのおもちゃができたのは、とても頭のいい研究者たちが動物たちの言葉「動物語」を発見し、その勉強をしたおかげなのだと教えてくれました。さらに、トモちゃんのパパはその「とても頭のいい研究者」の一員で、翻訳のお手伝いをしたお礼にもらったのがあのおもちゃだったそうです。物心ついたときからずっとお隣に住んでいる私ですが、トモちゃんのパパがそんなにすごい人だったとは思いませんでした。再び私はびっくり仰天、口をあんぐりと開けてしまいました。

「よその猫で試して、本当におしゃべりできるか確かめたんだあ。もうこれで安心。帰ったらいっ

ばいおしゃべりするんだ。うちの猫がなんてしゃべるか、知りたい？」

「知りたい！」

「いいよお。教えたげる、メールする」

トモちゃんの話し方はまるで歌を歌っているかのようでした。おまけにくるくると踊りだすので、私は楽しいミュージカルを観ているような気持ちになって、拍手を送りたくまりました。途中で、調子づいて三回転ジャンプに挑戦したトモちゃんは、危うくおじいさんが乗っていた自転車とぶつかりそうになって雷を落とされてしまいました。それでも私たちは、何とか無事にそれぞれの家に帰りつくことができました。

またね、と言いつつあともトモちゃんはまだ一人でミュージカルを続けていました。その陽気な歌声につられて、私はこっそりトモちゃんの方を振り返ってみました。目を向けた先では、トモちゃんに背負われた真っ赤なランドセルが、西に落ちようとしている太陽の光を受けて、この上なくピカピカと光っているのが見えました。

おやつの大福を頬張りながら、私はトモちゃんからいつメールが届くかとそわそわしながらタブレットを眺めていましたが、意外なことに連絡は一向にありませんでした。きっと夢中になって遊んでいるのだろう、とそのときは深く考えず、私は温かい緑茶をずるずるとすすりました。

ところが、それから日が暮れて、晩ごはんの時間を過ぎて、お風呂に入って、パジャマに着替えて終わって寝る時間になっても、一度もメールが届くことはありませんでした。

翌朝、トモちゃんの家のチャイムを鳴らすと、トモちゃんママが出てきてくれました。

「トモね、今日は具合が悪いから学校お休みするの。メール送っておけばよかったんだけど……ごめんね」

トモちゃんママは申し訳なさそうにそう話してくれましたが、何となく顔色が悪く、気分がすぐれない様子です。わかりました、と返事をして学校へ向かおうとする私に、小さくため息をしてもう一度、ごめんね、と繰り返しました。

いつもはトモちゃんといっしょに行く道を、今日は私一人で歩いて行きます。途中で何度も、くるくる踊るトモちゃんの姿や、その背に負われたピカピカの真っ赤なランドセルが、視界の隅々ここにちらついている消えていきました。

私は何だか心配になりました。昨日はあんなに元気だったのに。危うく自転車とぶつかりかけるほど、浮かればんちだったのに。怒られても、へっちゃらだったのに。きっとただのお休みではありません。元気はつらつな人が急に病気になるのはおかしいことだと、私は思うのです。それに、トモちゃんママ。ちょっと元気がないのは、トモちゃんが大変なことになって心配でたまらないから、かも。考えだすいてもたってもいられなくなったけれど、遅刻はいけません。私はとりあえず学校へと急ぎました。

トモちゃんがない、砂漠みたいに味気のない時間。テレビ通話でも授業はできるのに、難しい理由をつけてわざわざ教壇に立つ先生の声に合わせて、液晶の上でタッチペンをすらすらと動かすばかりで、あっという間に過ぎていきます。

何とも思う気持ちかわかないままに、放課後がやってきました。

チャイムが鳴ると、私は誰よりも早く校舎を飛び出しました。

燦々と太陽が照りつける中、帰り道を一人でひた走ります。途中であのキジトラ猫が、昨日と同じように日陰で休んでいるのが見えました。おもちゃを持たない私は黙って通り過ぎます。キジトラ猫の方もまた、何も言わずに走り去る私をじっと見つめているようでした。何か言いたいことがあったのかもしれませんが。

ぜいぜいと息を上げながら、トモちゃんの家の前に辿りつきました。けれども、今チャイムを鳴らしてもまたお疲れ気味のトモちゃんのママが出てきて、家に帰されるだけかもしれません。暴れる心臓を無理に落ち着かせて、私は一度自分の家に戻ることにしました。

手を洗ったあと、おやつプリンをつつきながら、タブレットのメールボックスを開き、トモちゃん宛てにメールを作ります。だいじょうぶですか、お元気ですか、今日学校ではこんなことがありました、私はあまり楽しくなかったけれど……。そんな内容のメールです。終わりの言葉として、よかったら猫ちゃんとお話をしたか聞かせてください、と書いておきました。送信ボタンを押す頃には、プリンはほとんどなくなってしまっていて、容器の底に苦いカラメルがちょっとだけこびりついているばかりでした。何だか損をしたという気持ちが、うっすらと霧のように胸の中に漂いました。

返信は思っていたより早く届きました。

——よくないの。

だいたいようぶです、とも、メールありがとう、とも書いてはなく、ただ、よくないの、の五文字と小さな丸が一つだけ。

これはホントのホントに大変だッ、と私は椅子から跳び上がりました。その勢いのままに、プリンのカップと匙をシンクに投げ、靴を履き、玄関を飛び出しました。

チャイムを鳴らすと、すぐにトモちゃんのママが出てきてくれました。顔色は今朝よりもだいぶ良くなっているようです。私はほんの少しだけ、ほっとしました。

「あらルイちゃん、今朝も言ったと思うけど、トモは具合が……」

力強く首を横に振り、それでも会いたいんです、と私は食い下がりました。このときの私は、不安の崖っぷちにおいて、とにかくトモちゃんの顔だけでも見て早く安心したい気持ちでいっぱいだったのです。トモちゃんのママは困ったように後ろを振り返りました。何かの様子を窺っているようです。もしかして、すぐ後ろにトモちゃんがいるのでしょうか。

このままじゃ本当に帰らされちゃう、と慌てた私はバクバクと心臓をうるさいほどに打ち鳴らしながら、トモちゃんからメールをもらったんです、と舌を噛み噛み話しました。あらそうなの、という言葉と同時に、トモちゃんのママの背後から、トモちゃんがひょっこりと顔を覗かせました。まるで子どもの幽霊のようなトモちゃんの登場に、ただでさえうるさかった心臓が一段と大きく跳ねて、私はわっ、と悲鳴を上げました。そのとき、あまりの驚きに思いきり身体をのけ反らせてしまい、危うく仰向きに倒れそうになりました。再び跳ね上がる心臓。いよいよ大惨事かと思われた瞬間、トモちゃんのママが私の両手を咄嗟に掴んで引き止めてくれました。一瞬のう

ちに二度も大きく跳ねた私の心臓は、その反動で却って落ち着いてしまいました。

落ち着いてから、一度、大きく深呼吸をしました。

トモちゃん、と呼びかけてみます。けれども返事はありません。顔を俯かせたまま、小さな唇を尖がらせています。

「トモ、いいよね？ ルイちゃんに、話聞いてもらおうよ」

さっき出てきた苦笑いが顔に貼りついたままのトモちゃんのママが、自分の背後から全く動こうとしない娘に優しく話しかけます。トモちゃんはたっぷりと間を置いて、一度だけ小さく頷きました。

家に入れてもらおうと、リビングに案内されました。電気のついていない、窓から傾きかけた日の光が差すばかりの、うす暗いリビングでした。

言われるがままに、私は大人しくソファに腰かけます。その横にトモちゃんもちょこんと座ります。ちょっと待ってね、と言いついてトモちゃんのパパはリビングから出て行きました。

二人きりのリビングは、トモちゃんの家とは思えないほど、何の音も笑い声もなく、真夜中のように静まり返っていました。

「トモちゃん、ねえ」

トモちゃんは相変わらず俯いていて、小さな唇も尖らせたままでした。何度声をかけてみてもやはり返事はありません。顔を覗きこもうとすると、ふいと背けられてしまいました。

再び静かになりました。

じっとしているのもつらくて、私は首を右に左に忙しなく動かしながら辺りを見回します。あのおもちゃがカーペットの隅っこの方に置いてありました。ただ、置いてある、というにはあまりにぶっきらぼうです。

「ね、おもちゃ……」

トモちゃんの肩がびくりと大きく跳ねました。その顔は相変わらず俯いたままでした。

「どうだったの？ ね、ね……」

「う」

ううう、と唸って、トモちゃんは顔を膝の中に埋めると、背中を小刻みに震わせました。ときどき、ずるずると鼻をすする音が聞こえます。私ははっと息を呑みました。

トモちゃんは、泣いているのです。

トモちゃんママが、お菓子がたくさん盛られた大皿や麦茶を入れたグラスをお盆に乗せて戻ってきました。おまたせ、と呑気な調子でゆらりとリビングに入ると、真っ先に泣きじゃくるトモちゃんに気がついたようで、あらあらと声を上げました。テーブルの上にお盆を置いて、ちょうど一人分空いていたトモちゃんの隣に座ると、トモちゃんママは何も言わずに娘を抱きしめ、頭を優しく何度も撫でました。トモちゃんはまるで赤ちゃんのように小さく丸まり、母親の胸に抱かれています。

「トモちゃん、どうしちゃったんですか？」

トモちゃん越しに尋ねてみると、トモちゃんママはうーん、と困ったように小さく唸って、

娘の顔を覗きこみました。

「ねえトモ、ママからルイちゃんに話していいかな。トモは部屋にいいから」

しゃくりあげながらトモちゃんは頷きました。トモちゃんのママは頷き返して、娘の手を引っ張って立ち上がりませました。鼻をすすり、肩を震わせ、目を乱暴にこすりながら、トモちゃんは何も言わぬままりピングを出て行きました。

「ごめんね、ルイちゃん。トモは今日一日、ずっとあの調子なの」

私は何と答えたらいいいのか迷いに迷って、ようやくたった一言、いいえ、とだけ答えました。

「それでね、ええと、ルイちゃんは知ってるよね。動物語の翻訳機。トモったら昨日、学校に持ち出していたんでしょ？」

なるべく大きく頷きました。言葉の出ない私なりの気の遣い方でした。トモちゃんのママは、そんな私の気持ちを通じたのか、口を緩やかに歪めて優しく笑いかけてくれました。

「学校から帰ってきて、早速うちの猫に使ってみたの。そうしたら」

ふう、とため息が聞こえました。今朝と同じような、お疲れ気味の顔が見えました。

「ひどいこと、言ったのね」

「えっ」

「ねこ」

そう、とトモちゃんのママは自分の言葉に頷きました。

「猫がね、ひどいこと言ったのよね、トモに。何て言ったんだったかな」

よく覚えてないけど、と目尻を下げ、苦笑いを浮かべてトモちゃんのパパは話を続けます。

「ひどいことを言い捨てて、猫は家を飛び出してしまったの」

それから帰って来ないのよ、お腹もすいているでしょうに。

トモはずっとあの調子だし。

どうしようかしらね。

困ったわ……。

トモちゃんのパパの言葉は、だんだん私ではなく、トモちゃんのパパ自身に聞かせるように響くようになりました。トモちゃんのパパは、本当に困っているのです。

私はそんな、垂れ流され続けるトモちゃんのパパの言葉を耳で受け止めながら、目の前のテーブルに置かれたお菓子の山や水滴のひつついた二つのグラスを眺めていました。このリビングは、薄暗くて静かで、どんよりとした黒雲がかかっているように重苦しいです。それなのに、目の前に置かれたお菓子とグラスは何も知らない顔をして、ただ誰かに食べられるのを呑気に待っているばかりです。今の私にとっては、何より羨ましい存在でした。

「ごめんねえ。そういうわけなの。トモもほっとけばすぐ元気になると思うから、そのときはどうぞ、よろしくね」

はい、とだけ返事をしました。トモちゃんのパパは、困った困ったと口にしてるうちに気が楽になったようです。顔色がずっとよくなっていました。

せっかく来てくれたんだもの、お菓子でも食べてゆっくりしてね、と親切な言葉を残して、ト

モちゃんのママはリビングを出て行きました。わざわざ出してくれたものに手をつけないのは悪いと思い、私は一人、しばらくの間ぼそぼそとお菓子を食べました。

ちらちらと、カーペットの隅っこ、ぞんざいに置かれたおもちゃに目をやりながら……。

あれは、トモちゃんにとって、悲しくてたまらない出来事の跡です。

トモちゃんの大好きな猫。鼻の真下のブチ模様。マヌケな顔をした猫。

どうしてだろう、と考えたところで、私にできることはひたすらにお菓子を頬張り、麦茶をすすることばかりでした。麦茶はとても冷えていて、一気に飲み干そうとすると頭が鋭く痛みました。

気がつけば叱られそうなくらいにたくさんのお菓子を食べていた私は、まるまると膨れたお腹を抱え、慌ててリビングを飛び出しました。挨拶をしなきゃと思いついて、トモちゃんのママを探してきよろきよろと廊下を見回していると、ルイちゃん、と名前を呼ばれるのが聞こえました。

振り返ると、一体いつからそこにいたのか、階段を背にしてトモちゃんが立っていました。

顔はくもっているけれども、先ほどよりもずっと気持ち落着いているようです。涙も鼻水も止まっただけで、何より、私の顔を真正面から捉えていました。ようやく、ちゃんと顔が見えました。目が合いました。赤く腫れた目でした。

こちらが口を開こうとした瞬間、トモちゃんは、ごめんねルイちゃん、と言いながら頭をぺこんと下げました。またね、とだけ言うつもりでいた私は、またもや何と答えればいいのかわからなくなっていて、ううん、と唸るような声を出しました。これだけではいけないと、続く言葉も頭の

中で一生懸命探します。

「ト、トモちゃん、もう、元気になったの？」

やっとの思いで絞り出した、言葉らしい言葉。けれどもトモちゃんは、にこりともせずに黙って首を横に振りました。

「ねえ、あのおもちゃ、持って行っていいよ」

「えっ」

思わぬ言葉でした。

「ルイちゃんにあげる。もういらないの」

それだけ言うと、トモちゃんは私にくるりと背を向けました。二階に自分の部屋があるトモちゃんは、階段を上って行きます。

呆然としている私の目の前に、不意にトモちゃんのママが台所からひょっこりと顔を出しました。階段を上っていく足音を聞きつけて様子を見に来たのでしょうか。

あらもう帰るの、と尋ねてきたトモちゃんのママに、私はトモちゃんに言われたことをそのまま伝えました。トモちゃんのママは一瞬面食らった顔をしましたが、

「トモがそう言うなら」

とりピングに放ってあったおもちゃをわざわざ拾ってきてくれました。

「大切にしてね」

トモちゃんの家を出ると、目の前であのキジトラ猫が前脚をたたんで待ち構えていました。

西日に目を細めながら、その場をじっと動かないキジトラ猫に、私もつられて足を止めました。ここらへんも縄張りなのだ、などと思っただけでよく見てみると、その小さな口には見覚えのある小さな機械がくわえられていました。

——ルイちゃん、この猫、今しゃべったねッ。

まるで雷の光のように、トモちゃんの声が私の頭の中で弾けました。

はっとして、私は両手に抱えたおもちゃに目をやりました。よくよく見れば、通信機がついていません。トモちゃんの家を飛び出した猫の背中にくっつけたままになっていたのを、このキジトラ猫が取ってきたのでしょうか。二匹は知り合いなのでしょう。

キジトラ猫の口から通信機を引き抜いて、背中にくっつけます。やはり嫌がられることはありませんでした。

本体のスイッチを入れ、いざマイクに向かって話そうとした瞬間、猫が先にみゃあーん、みゃあみゃあとおと鳴きだしました。本体のランプが点滅し、スピーカーから機械的な声が流れます。

『ブチは、言いました。ごめんなさい、トモと』

ブチ？ とオウム返しをしながら、私の頭の中にはトモちゃんの家にはいた飼った猫の、鼻の真下にあるブチ模様が浮かんでいました。きつと、その猫のことです。キジトラ猫はトモちゃんの家をブチと呼んでいたのでしょうか。そういうえば、あの猫は何という名前だったか。トモちゃんの家では、誰もあの猫の名前を呼んでいなかったように思います。

キジトラ猫はまおーん、と低く鳴いて、続きを話し始めました。

『ブチは年を取りました』

まーお、まーお、とキジトラ猫は鳴き続けます。

『だからもうトモといっしょにいることはできません』

『ブチは、ひどいことをした、と言っていました』

『彼女もブチも、話をするのがとても下手だったから』

『しかし、これでもしブチが死んでしまっても、彼女が悲しむことはありません』

『ブチは自分の死のために彼女が泣くのを何よりも避けたかったです』

そうだったの、と口から漏れ出た言葉を、本体のマイクが拾い上げました。通信機が点滅し
す。

『ブチは、このことは彼女に言っではならないとわたしに言いました』

『けれどもわたしは、あなたには伝えておくべきだと思っただけです』

どうして、とマイク越しに尋ねてみます。ところがキジトラ猫は返事をしませんでした。何事もなかったかのように大きなあくびをして立ち上がると、通信機を背中にくっつけたまま、どこかへと駆け出してしまいました。

おもちゃは再び使えないものになりました。

けれども、そもそもペットを飼っていない私は、二度とこれを使おうとすることはないだろう
と思いました。

台所を覗いてみると、母はタブレットでレシピを眺めて、今日の夕飯の献立を考えていました。台所を覗く娘に気がつく、母は私のまるまる膨れた腹にもそうでしたが、何より手に持っているおもちゃに驚いているようでした。事情を話すとすぐさまスマートフォンをどこからか取り出して、お礼を言わなくちゃと騒ぎながら電話をかけました。

もうおもちゃは使いものにならないとは知らない母の、ぺこぺこと嫌らしいほどに優しい声ばかりが響く台所をあとにして、私は自分の部屋に向かいました。おもちゃをベッドの上に置き、タブレットの中にダウンロードさせた算数の宿題に取りかかります。問題を解き、答えをタッチペンで入力しながら、私は頭の中でキジトラ猫の言葉を何度も何度も繰り返しました。

——あなたには伝えておくべきだと思ったのです。
あなたには、伝えておくべきだと思ったのです。

私には……。

もしかして、私の口からトモちゃんに伝えろ、ということなのでしょう。でも、ばか正直に、ブチが死にそうなことを伝えたら、トモちゃんは今以上に悲しむに違いありません。息もできないくなるほど泣いて、もしかしたら、死んでしまうかもしれません。とはいえ、もしもブチがトモちゃんを嫌っているという誤解が解けないまま時が流れて、トモちゃんが暗い大人になってしまったら大変です。太陽が氷づけになってしまうようなものです。

不意に、ポコン、と軽快な音が鳴りました。タブレットの画面には、一件の新作メールがあります、とのメッセージがありました。宿題を途中で止めて、メールボックスを開いてみます。差

出人の名前を確認すると、なんとトモちゃんからでした。

身体中が緊張するのがわかりました。糸に引っ張られているかのように自由がききません。

震える指でメール本文を開きます。

——ルイちゃんへ。

お菓子はおいしかった？

今日ごめんなさい。さっきも聞いたと思うけど。

ママがもう一度謝っておきなさいと言うのです。

あのおもちゃは、遊んでくれても、捨ててくれても、本当に構いません。ルイちゃんの好きに
してね。

明日からは学校に行きます。

またいっしょに行ってくれるとうれしいな。

——トモより。

文体がばらばらで、話題があちこちに飛び散ってしまった、何ともちぐはぐな文面。トモちゃんらしいな、と思った私はフフン、と鼻を鳴らして一人で笑いました。いつものトモちゃんに戻ったんだという、じんわりと嬉しい気持ち胸の中に染みこんでいきました。きっとトモちゃんはたくさん泣いて、あの小さな身体の中で大きくふんぎりをつけることができたのでしょう。本当のことを話す必要なんかありません。キジトラ猫から聞いたことを、やはり私は黙っておくことにしました。

次の日の朝、ちょうど学校へ行く支度を終えた頃、ピンポンとチャイムが鳴りました。誰が鳴らしたのかはわかっていました。私はリュックを背負い、靴を履いて玄関のドアを開けます。

私の姿を認めると、トモちゃんは小さな歯を覗かせて笑ったかと思えば、おはよう、とまるで鉄砲玉のような勢いで挨拶をしました。私は挨拶をし返そうとしましたが、手をいきなり引っ掴まれてしまいました。トモちゃんは問答無用で駆け出します。いつも通りの、元気はつらつなトモちゃんです。

ところが、手を引かれて走る私は、目の前で揺れるトモちゃんの背中を見てぎょっとしました。トモちゃんの背中には、あの時代遅れの、ピカピカに光る真っ赤なランドセルはありませんでした。その代わりに、他の皆や私とお揃いの、タブレット用のリュックが背負われていました。

「トモちゃん、かばん、替えたのね」

息を切らせながらトモちゃんは答えました。

「もうランドセルは古いって。だから、昨日の夜ね、ルイちゃんが帰ったあと、パパが、買って帰ってきてくれたの！」

突然トモちゃんは足を止めました。汗で湿った手をほどき、肩で息をしながら、満面の笑顔をこちらに向けました。

「猫も！」

そのとき私は、胸の辺りを強く殴られたかのような、そんな衝撃に襲われました。

そのせいかな、血のめぐりがのろまになって、足がもたつくのがわかります。

「え、ねこ……、新しく、飼うの？」

回りが鈍くなった頭の中で、私は必死に言葉を組み立てます。うん、と頷いて、トモちゃんは一回転ジャンプを軽々と跳びました。

「とってもかわいい、真っ白の子猫！ 名前は、そうね、考え中。それでね、またおもちゃをね、パパが貰ってきてくれて……」

あんなにやかましくて、元氣いっぱいなのはトモちゃんの声が、少しずつ小さくなって、ぱったりと聞こえなくなっていました。

呆然と突っ立ったままの私を置いてけぼりにして、トモちゃんはスキップで前に進んでいきます。振り返ることもなく、どんどんトモちゃんの背中では遠ざかっていきます。

背負われたリュックは、朝日の光を受けても、決してピカピカと輝くことはありませんでした。

——ブチは、

言いました、

ごめんなさい、

トモ……。

機械から流れ出す音声。翻訳された言葉。無機質な声音なのに、頭の中で渦巻いて、その一つが私の心臓をげんこつで叩き続けます。……ブチは、言いました、ごめんなさい……。

遠くから、ルイちゃん、何してんのお、早くう、と大きくて間延びしたトモちゃんの声が聞こえます。我に返って踏み出した一步はとても重たく、どっと疲れた私は大きく息を吐きました。そうして一歩ずつ、深い呼吸と共に歩みを進め、何とかトモちゃんの姿を捉えることができました。腕組みをして私を待ち構えていたトモちゃんは、遅れちゃうよッ！と一言残して、くるりと背を向けて再び歩き始めました。未だに重たい足を引きずらせ、黙ってついでに行くうちに、トモちゃんの背中が急に見えなくなりました。その場にしゃがみこんでいたのです。私はあやうく丸まったトモちゃんを蹴飛ばしてしまふところでした。

しゃがみこんだトモちゃんは、みゃんみゃん、みゃおみゃおと雑な猫の鳴きまねをしていました。そっと覗き込むと、あのキジトラ猫が前脚をたたんでじっとしているのが見えました。ちっとも鳴かずに、真正面にいるトモちゃんの顔を見つめています。

その背中に、通信機はついていませんでした。誰かに取り外されたか、どこかに落としてしまったのでしょうか。

ときどき、ちらりとこちらにも目をやるので、私は何とも言えない気まずさを感じて、目線を猫から外しました。トモちゃんはそんな私には全く構うことなく、ソフソフと妙な笑い声を上げながら、猫の背中を撫でまわしたり、耳をつついたりしました。

「トモちゃん、遅れるって言ってたじゃない」

「ああ、そうだった」

トモちゃんはすんなり立ち上がり、再び私の手を引っ掴みました。

「今日のルイちゃん、何だかのろいからいっしょ行こう！」

うん、と曖昧に頷きながら、私はその場に残されたキジトラ猫に目を向けました。

猫もまた、こちらを見ていました。

まだトモちゃんと遊び足りないのでしょうか。それとも、何か言いたいことがあるのでしょうか。

私たちはどんどん遠ざかっていきます。キジトラ猫はちっとも動きません。

たった一つ、大きなあくびをしたのを最後に、とうとうキジトラ猫の姿は見えなくなっていました。

それからもずっとトモちゃんは手を離してはくれず、そのまま校門をくぐってしまいました。

教室に入ったトモちゃんは顔を真っ赤にしながら、いかにも清々しいという表情で笑いました。昨日見た、顔を俯かせた小さな女の子とはまるで別人のようです。

私は、陽気で、元気はつらつなトモちゃんが大好きです。だから、今のトモちゃんも大好きなはずです。

「あのね、ルイちゃん。昨日ね、あたし、宿題を先生からメールで送られてきたけど、やるの忘れちゃったんだ」

席につき、リュックからタブレットを取り出しながらトモちゃんは私に顔を向けました。額に汗をかいています。いつの間にやら私は自分の席にもつかず、ぼんやりとトモちゃんの傍らに立っ

ていたようでした。

何とも答えないまま、私はトモちゃんのリュックばかりを見ていました。

タブレットを取り出されたリュックは、その役目をとうに果たしたという顔をして、黙ってその場でしおれていました。新品で傷一つないというのに、机の上に無気力に横たわるそれは、くたくたに疲れ果てているように見えました。

——ブチは、このことは彼女に言っただけならいいとわたしに言いました。

——けれどもわたしは、あなたには伝えておくべきだと思ったのです。

頭に浮かぶのは、キジトラ猫の大きなあくびと、鼻の真下についた黒のブチ模様。冷たい機械の声。マヌケな顔。

膝の上。

「ごめんさい」

えッ、とトモちゃんは驚いたように目ん玉を大きく見開きました。口から自然と漏れ出していた言葉に、私もまた驚いて、息を呑みました。

目に映るのは、お人形みたいに全く動かなくなったトモちゃん。ありふれた、皆とお揃いのリュック。たくさんの映像が頭の中でこんがらがって、どうしたらいいのかわからなくなった私は、トモちゃんから目を逸らして、何も言わずに自分の席へと向かいました。トモちゃんもまた、何も言いませんでした。笑うことも、怒鳴ることも、泣くことさえありませんでした。それでは一体、どんな顔をして私の背中を見送っていたのかというと、私にもわかりません。

ようやく席につくことができた私は、全く使われなくなった黒板の、片隅にある落書きばかりを眺めながら、リュックからタブレットを取り出しました。

朝からはしゃぐクラスメイトたちの声が聞こえます。何だかとても遠くに聞こえます。すぐ傍でふざけていた男子の横腹が、私の机の角に軽くぶつかりました。

痛っ、と小さく呻いたあとで、その人と周りにいた友だちは、何がおかしかったのかどっと笑い出しました。

秒針がてっぺんを通りすぎて、朝一番のチャイムが鳴りました。それから秒針はコチコチと何の気持ちもこもっていなさそうな音を立てて、休まず歩みを続けます。

私は、湿った両目を拭きました。

砂漠のように味気のない時間が、教室中に流れ始めたように思いました。

放課後のチャイムが鳴ると、トモちゃんはいつもと同じように私の元に駆け寄ってきました。ルイちゃんいっしょに帰ろう、と小さな歯を覗かせた笑顔は、私の大好きなトモちゃんそのものの。

トモちゃんは、今日の私の様子がおかしいと、少しも首を傾げていないのです。今朝あんなにびっくりしていたくせに。せいぜい、やけにのろまだと思っっているくらいでしょう。

無理に口の端っこを吊り上がらせた私の手を引いて、トモちゃんはぴんぴん跳びはねました。

「今日ね、帰ったらあのおもちゃ、新しい猫に使うんだ」

「そう」

「ルイちゃん、知りたいよね。知りたいでしょ。あの子が何て言うかさ」

トモちゃんは一人で勝手にげらげら笑い出しました。楽しくてしかたない、と言わんばかりです。

「会わせたげる、猫！ 白い猫ちゃん！ うちにおいで！」

返事を待たずに、トモちゃんは私の手を引いたまま急に駆け出しました。

ブチのときはメールだけで済ませようとしてたのに。

途中で色んな先生とすれ違ったたびに、雷が落ちたように思いました。けれども暴走機関車のような勢いのトモちゃんがそんなことで止まる気配はありません。

その勢いのままに校門を出ると、トモちゃんはぜいぜいと息を切らしながらようやく止まりました。私の息も上がっていました。

「今日ののろまなルイちゃんじゃ、こうしないと日が暮れそうなんだもん」

はあー、と深く息を吐いたあとで、トモちゃんはそう言いました。言葉は強いけれど、悪気がない。にんまりと歪んだ唇から覗く、小さな白い歯がその証拠。それに対して私は、うん、そうだね、とだけ答えました。

じゃあ行こう早く行こう、と再びトモちゃんは私の手を握ったまま駆け出しました。靴音をテンプよく鳴らしながら、コンクリートを軽快に蹴飛ばしていきます。しっかりと握りしめられた

手のひらでは、私の汗とトモちゃんの汗が滲んで溶けあい、じっとりとした嫌な湿り方をしていました。私は思いきり手を振りほどいて、服の裾やらハンカチやらで拭き上げたくなりました。けれどもトモちゃんは手を放そうとしてくれません。立ち止まる気配もありません。

「ねえ、ルイちゃん」

鳴り続ける靴音に紛れて、トモちゃんの声が聞こえてきます。トモちゃんの声は、それほど大きなものでした。

「猫ちゃんの名前、何がいいかなあ！」

うーん、何がいいかなあ、と私は中身の無い、からっぽな返事をしました。トモちゃんはそれに対して、なあに聞こえない、と繰り返すばかりです。本当に聞こえていないのか、それとも聞いていないだけなのかはわかりません。トモちゃんの、その表情が見えないのです。私の目の前ではただ、小さな背中でありふれたリュックが揺れているばかりです。

すぐそこに、いつもの角が見えます。

曲がったらきっと、キジトラ猫が日陰でくつろぎながら、まるであざけるように尻尾でも揺らしているのでしょうか。

私はひたすらに、うーん、とだけ延々と、悩んだふうに唸ってみせました。

もう、それだけでいいのだと思いました。

(文学部文学科四年)

東光原文学賞総評

選考委員長 跡上 史郎

東光原文学賞の新たなディケイドの始まりとなる第十一回は、これまでになく質の高い作品の数々が寄せられ、審査員の間でも意見が割れる大波乱となりました。面白い体験ができて、とても嬉しく思っています。

受賞者との懇談で面白いと思ったのは、小学生で漫画を書いたり、中学生でライトノベルに挑戦してみたりと、早い段階でなんらかの表現への意志を持っている人が多かったことでした。もっと幼い頃から厚紙で玩具を自作していたという人もいて、それも文学を組み立てるといふことに通じているのかもしれませんが。

もう一つ大事なのは、それぞれに憧れの好きな作家がいるということです。つまり、お手本を踏まえて、そこに自分なりの組み立てや表現の工夫を加味していくことのできる人が、結果的に受賞に至ったということになるでしょうか。

◇優秀賞「財布なんざ常に領収書でいっばいだ」

荒削りでぶっさら棒な印象を与える作品ですが、それが独特の味となっています。とどこどこ

ろに光る詩的な表現があり、可能性を感じさせます。苛立ち混乱する語り手の内面に対応して、彼の遭遇する出来事もなかなか解決せず、文体と内容が非常によくマッチしています。実は小物の使い方も上手かったりして、ぶっきら棒は装われた戦略であることがわかります。

◇優秀賞「トモちゃんと猫」

ですます体の児童文学、子供向けの作品かと思いきや、実はリアルで重い話です。そのギャップに唸らされました。居心地の悪い不安がじわじわ亢進していつ、プラス方向には解消されず、マイナス方向に解消されてしまうのです。子供の純粹さや無邪気さがそのまま残酷さや酷薄さに転化してしまう事態になす術がない語り手の葛藤もやるせない逆児童文学と言えるでしょう。

◇優秀賞「柿」

「心情と言動の不一致」により人間の内面が表現されるといふ近代文学の伝統に則った正統派の作品です。老人たちへの仮借ない残酷な視線も、語り手の内面に閉じた世界の表現なのですが、その徹底ぶりに審査員たちも圧倒されました。それを踏まえた上で最終的に父へと手渡される「柿」に、閉じた内面からの外部への通路が垣間見えます。息詰まるような力のこもった作品でした。

◇大賞「好きじゃないひと」

まだ概念化されていない、なんと名付けたらよいかわからないものにかろうじて輪郭を与えようとするのは、文学の持っている大事な機能の一つです。LGBTといった見慣れた言葉からはこぼれて落ちてしまう同性への複雑な関心に捕らわれた語り手の戸惑いをうまく掬い上げていま

す。そして、自分でも理解しがたい想いを処理しきれないでいる語り手のことを、傍で実によく理解してくれている一見お調子者の友人の存在が、この作品にさらなる奥行を与えています。語り手が別の人のことばかり気にしていて、この友人のことをまるでわかっていないのが、また、甘酸っぱいような苦いような複雑な味わいにつながっているのですが、それをさりげなくさらりと流して処理しているのが好ましい、佳作です。

その他、惜しくも受賞には至りませんでした。「ある夏の肖像Ⅰ」は比喩表現が巧みで、一定の力量を有する書き手であることがわかる作品でした。また、短編を募集する東光原文学賞の枠組みでは、少し損をしてしまったかなというエンターテイメント系のももありました。エンターテイメントは、ある程度型通りでなければなりません。そこに個性を盛り込むには長さが必要なのです。「平成の陽炎」は、ミステリー仕立てのファンタジーとして構成が確立されています。現在の時間と過去の時間を行き来する設定も今風で、これを平成という時代の終わりに関係付けるプロデューサー的発想は評価できると思いました。「夏へ向日葵を」は病と死というエンターテイメント系でよく見られるパターンですが、出来事の記述の順番を工夫しながら、登場人物の行動の意味や心情が明確になっていく組み立てができています。「二羽の鷹」は中東イスラム世界の歴史小説という難しいジャンルに挑戦しているのが良いと思いました。これは長編の一部のようです。そして長編歴史小説を書き切る力をも身につけるためには、相当の勉強が必要かと思えますが、きっとやり甲斐のある仕事であるに違いありません。

投稿作にはもちろん巧拙や出来不出来といった差はあったのですが、なぜだか書かずにはいら

れなくて書いたという印象を与えるものが多かったように思います。三島由紀夫の言葉を借りるならば、何かに「つかまれて」いる状態です。あなたが、何かに「つかまれて」書いたならば、それは結果に関係なく、とても素晴らしいことなのです。入選した方もしなかった方も、自分が何に「つかまれて」いるのかわかるまで、書き続けてみてください。そうすれば、巧拙や出来不出来に関係なく、それは「本物」になるはずです。

● 跡上史郎（あとがみ・しろう）

熊本大学大学院人文社会科学研究所（文学系）准教授。専門は日本近・現代文学。

熊本文学隊代表世話人として「いま石牟礼道子をよむ…三浦しをん×高橋陸郎×伊藤比呂美」（二〇一八・一一・一〇、於 Denkikan）の企画・運営等。

その他「澁澤龍彦『高丘親王航海記』から見る三島由紀夫『豊饒の海』（『三島由紀夫研究』[18]、二〇一八）、「はじめての村上春樹 最新長編『騎士団長殺し』と熊本」『KUNAMOTO』[24]、二〇一八）、「かひがひしからぬ「諸君」——世界模型としての村上春樹『騎士団長殺し』——」（『近代文学試論』[54]、二〇一八）等。

講評

選考委員 松岡 浩史

たとえば月曜日の早朝に東京、新宿の駅のホームで思い詰めている中年男性の後ろ姿がある。あなたは、彼が線路に飛び込むのではないかと不安になる。この時、あなたは、「彼を追い込んでいるのは十年前に起きたある事件が原因で、彼の自意識の揺らぎが彼を苦しめているのかもしれない」と想像するだろうか？それとも「彼は早期退職という名目で解雇されたのかもしれない」。その原因は今の日本経済が……と分析するだろうか？

作家の村上龍が以前、ラジオでおおよそこんな話をしていました。彼は、村上春樹と自分の作風の違いについて暗示的にこのような例を挙げたのだと記憶していますが、どちらも文学的なアプローチであることに違いはありません。文学は自意識の流れをつぶさに観察し、表現するものかもしれない。一方で、そのような自意識の流れなど問題にならないような大きな体験や災難もある。人間の複合性に対する悩みをいわば前提としてわきに置き、それでも行動する人間の美学を描くのもたしかに文学でしょう。

本年度のエントリー作品に多く見られたテーマは「他者と交われない自分」であったように思います。自分は他人とは違う。自分だけの秘密がある。自分が自分であることとは何か。これはいわば瑞々しい文学的初期衝動、文学の原風景と言ってもいい。

漫画家の手塚治虫は、引き出しに鍵をかけたまま亡くなってしまっ、死後二十年以上たってから娘さんが引き出しを開けたそうです。そこには蛇やネズミを女性に擬人化して描いたヌードデッサンがたくさん見つかった。これは手塚が人に見せるために描いたものではなく、極めて個人的な、自分自身のための作品であったのだと思います。つまり、創り手には、時として人には打ち明けられない秘密があって、その秘密を表現するただけに作った、日記のように極めて個人的な作品も存在するということです。彼「女」は、自分の抱える世界との違和感や葛藤を、作品として昇華することによって自らを救う。そこには作者の真実が宿っていると言えるでしょう。今回の大賞受賞作『好きじゃないひと』は、一見するとそのような日常に対する違和感、倦怠感を扱った作品であるように読ませます。ところが、読み進めるうちにそこに同性愛の地平をうっすらと予感させながら物語は展開していく。しかし、主人公はそのこと、すなわち、ジェンダー・アイデンティティについて葛藤することはありません。ただ、語り手の純粋な感覚だけが、丁寧に描かれていく。

二〇一七年に公開された映画『君の名前で僕を呼んで』（ルカ・グアダニーノ監督作品）は、男性間の恋愛を描きながら、LGBTQ映画だとは言えません。それは、今回の大賞作と同様、登場人物たちが誰一人として自らのジェンダー・アイデンティティに悩むことなく、ただただ美しい純粋な恋愛が描かれるからです。舞台設定の一九八三年であるならば当然言及されるべきエイズ・パニックも描かれない、言わばファンタジーの世界なのです。

東光原文学賞にもマイノリティ表象の波は訪れるものと思っていました。が、作者がLGBTQ

の問題を意識していたか、どうかは兎も角として、静かに、自然に、疑いもなく、片思いの感情がこぼれていくその筆致には感心しました。

優秀賞受賞作はいずれも秀作揃いです。子供の語り手によって、〈存在〉が交換可能なものであるのか、固有のものであるのかという普遍的なテーマを描いた『トモちゃんと猫』、主人公が抱える心の闇を安易に相対化しない『柿』、孤独を荒々しく、なおかつ手で触れられるようなさらさらとした感覚的筆致で描いた『財布なんざ常に領収書でいっぱいだ』、いずれの作品も独自の世界観を見事に構築しています。創作には必ずテーマとそれを伝える表現技法が問われます。例えば、戦争や差別に対するプロテスト（抗議）の作品を書くならば、「戦争・差別反対!」と言ってしまおうと、文学表現としてそれは負けだと言えます。文学の要諦は、テーマを語らず、いかに作品の構造や語りの手法で読者自身にそれを気づかせるかということでしょう。映画が映像によって、演劇が身体と台詞によってそれを表現するように、文学は文章によって読者の想像力に働きかけるメディアだからです。

●松岡浩史（まつおか・ひろし）

熊本大学大学院人文社会科学学研究所（文学系）准教授。専門はシェイクスピアを中心とする英米演劇。

著書・共著に『文学と歴史の曲がり角―英米文学論集』（英光社、二〇一四）、『ヘルメスたちの饗宴』（音羽書房、二〇一三）、『シェイクスピアの広がる世界―時代・媒体を超えて―見る』テクスト』（彩流社、二〇一一）、『世界の鏡としての身体―シェイクスピアからアニメーションまで―』（身体表象文化学出版会、二〇〇八）などがある。

講評　　すぐにはわからないもの

選考委員　岩瀬　茂美

世の中には「すぐわかるもの」と「すぐにはわからないもの」がある。かつて新聞のコラムにも引用したことがあるが、エッセイストの森下典子さんが、映画化もされた著書『日日是好日』でそう振り返っている。

「すぐわかるものは、一度通り過ぎればそれでいい。けれど、すぐにわからないものは、何度か行ったり来たりするうちに、後になって少しずつじわじわとわかりだし、『別もの』に変わっていく」。森下さんの場合、それはフェリーニの映画であり、茶道の世界だった。自分が見ていたのは、全体の中のほんの断片だった。ある日、コップの水が一気にあふれだすように世界が広がる瞬間を味わうのだ、という。

東光原文学賞の選考委員を務めるのは今回で三回目。新しい書き手との出会いはいつも魅力的である。選考委員として、「すぐにはわからないもの」を見落としていないかという懸念もあるのだが、コップの水があふれるような作品に出会うことへの期待が上回る。自分の内面を見つめるまなざし、新しい表現を目指す試み、作品の世界観、文章にあふれた熱量…、そうした自分な

りの定点観測の視点に加え、「どれだけ心を揺さぶられたか」を選考基準の原点とした。

大賞「好きじゃないひと」は、同性の同級生にひかれる女子高校生の感情を淡々と描く。靴箱をめぐる感傷、女子生徒の描写などが丁寧に重ねられ、微熱のような空気感を出している。自分を映し出す他者の存在、他者との距離感を表現する技巧に優れている。

優秀賞「財布なんざ常に領収書でいっばいだ」は、サリンジャーや庄司薫を思わせるような饒舌な青春小説。シロクマのストラップやクリームパンなどのエピソードも秀逸だ。読後感もよい。優秀賞「トモちゃんと猫」は、児童文学の枠を借りた実験的な作品だ。平易な文章で淡々と展開していくが、結末に驚かされる。

優秀賞「柿」は、就活やスマホ社会への葛藤、スパイスの呪文などユニークな表現に導かれ、自分の歪みを見つめる世界に引き込まれる。

このほか、直喩を多用した独特の文体で喪失と再生をテーマにした「ある夏の肖像Ⅰ」、格調高く物語を構築した「二羽の鷹」、時間軸を交差させて家族の回復を映像的に描く「夏へ向日葵」が印象に残った。

いくつかの作品には、新しい物語を紡ぐことへの意欲を感じた。膨大な過去の作品が存在する中で極めて困難な試みだが、そこにこそ私たちの心を躍らせるものがある。音楽家の坂本龍一さんは、あるインタビューで「オリジナルであるためには過去に学ぶことも必要」と話している。一生懸命自分が考えて発明したつもりでも、何かに似てしまうことはしばしばある。過去の記憶と真摯に向き合い自分との対話を深めることから、もう一步先まで進んだ新しい作品になるとい

うことだろう。

古典的な作品の研究だけではなく、世界の今を見つめる視点も育ててほしい。人口減少社会や熊本地震、環境異変、外国人移住政策……。現代社会は、不透明な地層を積み上げるように日々を重ねている。新聞記者の仕事をしていると時々、さまざまな現場で起きた出来事や出会った人々が、不思議と結びつき、重なりあうような印象を感じることがある。他者を見つめることから、世界について考えるための新しい焦点が結ばれるのだと思う。

自分自身の内側と世界を丁寧に見つめることから、過去と現在、未来がつながり、新しい発見も生まれる。小説を書き続けることは困難だろうが、作家の視点を抱くことは人生を深くしてくれるだろう。自分の中のコップの水があふれる瞬間を体験してほしい。

●岩瀬茂美（いわせ・しげみ）

熊本日日新聞社地方部長兼論説委員。一九六三年、八代市生まれ。一九八八年、熊本日日新聞社入社。社会部、天草総局、編集本部、荒尾支局などを経て、二〇〇七年編集本部次長、二〇一一年社会部次長、二〇一三年同次長兼論説委員。二〇一四年文化生活部次長兼論説委員、二〇一七年編集委員兼論説委員、二〇一九年三月から現職。主な連載企画に「水俣病40年」「水俣病小史」「水俣病は終わっていない」（平和・協同ジャーナリスト基金賞特別賞）、「30代の地図」「熊本地震 連鎖の衝撃」「熊本地震 あの時何が」など。

第十一回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇一九年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

